

ふしぎな人

江戸川乱歩

青空文庫

1 マントにんぎょうのまき

きむらたけしくんは、しょうがつここの二ねん生で、とうきょうのひろいおうちにすんでいました。

おとうさんは、あるかいしゃのしゃちようさんです。

きむらたけしくんのおうちのちかくに、ふしぎなせいようかんがあつて、そこにふしぎな人がすんでいました。

二かいだてのふるいせいようかんで、そのまわりは、木のいっぱいはえたにわでかこまれていました。

このふしぎないえのふしぎな人は、はやし林さんという、四十ぐらい

のおじさんでした。

おくさんも子どももなく、たったひとりで、そのひろいせいよ
うかんにすんでいるのです。

きんじよの人たちは、このせいようかんをばけものやしきとい
つていました。また、そこにひとりですんでいる林さんを、まほ
うつかいとよんでいました。

ところが、きむらたけしくんのおとうさんは、このふしぎな人
とだいのなかよしだったので、林さんは、たけしくんのおうちへ
よくあそびにきました。

おとうさんはたけしくんと、いもうとのしょうがつこう一ねん
生のきみ子こちゃんに、よくこんなふうにいつてきかせるのでした。

「林さんはかわりものだが、けっしてわるい人じゃない。たいへんちえがあるのだよ。そのちえで、いろいろふしぎなことをやってみせるので、まほうつかいのようにみえるだけなのさ」

たけしくんもきみ子ちゃんも、林さんとなかよしになっていました。

ある日のごご三じごろのことです。たけしくんときみ子ちゃん、林さんのおうちのにわであそんでいました。たくさんのお木にかこまれたひろいしばふにこしをおろして、林さんのおはなしをきいていたのです。

林さんはくろいふくをきて、大きなくろいネクタイをとんぼむすびにしていました。

ふちなしの四かくなめがねをかけ、ぴんとはねた口ひげと、三かくのあごひげがあります。いかにもせいようのまほうつかいみたいなかつこうです。

その林さんが、こんなことをいいだしました。

「きみたちに、おもしろいものをみせてあげようか。びっくりするよなものだよ。わたしは、むこうの木のしげみにかくれるからね。すると、あそこのしいの木のねもとから、小さいものがあらわれるのだ。よくみているんだよ」

そういつて、林さんは、しいの木のむこうのしげみの中へはいっていききました。

たけしくんと、きみ子ちゃんは、むねをわくわくさせながら、

そのしいの木の下を、じつとみつめていました。

あたりは、しいんとしずまりかえています。はるのおてんきのよい日で、しばふには、日がたっています。でも、しいの木のへんからむこうは、木のはがしげっているのです、すこしうすぐらいのです。

「おじさん、なにをみせてくれるんだろうね」

たけしくんがいますと、きみ子ちゃんは、にいさんのかおをみつめながら、「あたし、こわいわ」と、いかにもきみわるそうにささやくのでした。

すると、そのときです。あの大きなしいの木のねもとから、なにか小さなものが、ちよこちよこはいだしてきたではありません

んか。

むしでしょうか。いや、むしにしては、大きすぎます。

しかも、それは、はっているのではなくて、二本の足であるいているのです。

それは、たかき二十センチぐらいの、おもちゃのにんげんなのです。

くろいふくをきて、くろいマントをはおり、くろいソフトをかぶっています。

かおは小さくてよくみえませんが、なんだか林さんのかおににているようです。

かわいらしい四かくなめがねがちかちかひかり、三かくのあご

ひげがはえています。

そのおもちゃのにんげんが、まるでほんとうのにんげんのよう
に、てくてくあるいているのです。

きつと、ぜんまいじかけであるくようになっているのでし
ょうが、それにしても、なんてじょうずにあるくのでし
ょう。

その小さなにんげんは、しいの木のとりの大きな木にかくれ
てしまいました。

たけしくんときみ子ちゃん、いまにあの木のうちろをとおり
すぎて、またあらわれるだろうとまっています。

やがてあらわれました。しかし、これはどうでしょう。あのに
んぎょうが、たかさ四十センチほどに、大きくなっているではあ

りませんか。

木のうしろをとおるあいだに、せのたかさがばいになってしまったのです。

「わあ、ふしぎだ。おじさんは、やっぱりまほうつかいだねえ。

おじさん……、おじさん……」

たけしくんは、そういつて、しげみのうしろにいる林さんによびかけましたが、林さんは、どこかへいつてしまったのか、しいんとしずまりかえつて、なんのこたえもないのです。

すると、ばいの大きさになったにんぎようは、二メートルほどあるいて、そのつぎの木のみきのむこうがわにかくれました。

まもなく、そこをとおりすぎてあらわれたにんぎようをみます

と、こんどは、一メートルもあるような大きさにかわっていました。

きみ子ちゃんとそんなにちがわないぐらいの大きさです。

たけしくんときみ子ちゃんは、びっくりしてかおをみあわせました。いよいよきみがわるくなってきたからです。

一メートルになったにんぎょうは、くろいマントをこうもりのようにひらひらさせて、木のみきをぐるっとまわり、もとのほうへもどってきました。

そして、さいしよのしいの木のみきにかくれたかとおもうと、つぎにそこからあらわれたのは、なんとおとなの大きさのにんぎょうだったではありませんか。

いや、にんぎょうではなくて、ほんとうのにんげんだつたので
す。

「わははははは……。どうだ、おどろいたかい。わしだよ。おじ
さんだよ。」

おじさんはね。二十センチぐらいの小人にもなれるんだよ。

そして、いまのように、みるまに大きくなって、もとのすがた
にもどれるのだよ」

ああ、なんとというふしぎでしょう。それでは、さっきの小さな
すがたも、にんぎょうではなくて、林さんだったのでしうか。

2 てんにのぼるまほうつかいのまき

きむらたけしくんは、いもうとのきみ子ちゃんとうたたりで、ちかくにあるふしぎなせいようかんへあそびに行きました。

そこには、林さんという、ふしぎな人がすんでいました。きんじよの人は、林さんをまほうつかいとよんでいたのです。

でも、たけしくんのおとうさんと、その林さんとは、お友だちなので、こわくはありません。

そのばけものやしきには、ひろいしばふのにわがあるのです。まほうつかいの林さんは、そのにわで、たけしくんときみ子ちゃんに、ふしぎなことをやってみせました。

虫のように小さな林さんがあらわれ、それがだんだん大きくなって、ほんとうの林さんのすがたにもどったのです。

たけしくんときみ子ちゃんは、びつくりしてしまって、ものも
いえないでいました。

「わははは……。おどろいたかい。これぐらいのことにおどろい
てはだめだよ。

いまにもつとびつくりするようなことがおこるからね。

せけんの方は、わしをまほうつかいだといっているが、それは
ほんとうかもしれないよ。

いいかい、こんどはどんなことがおこるか、よくみているんだ
よ」

くろいマントをきた林さんは、そういったかとおもうと、にわ
の中で、いちばん大きな木の下へ行つて、そのふといみきを、す

るするとのぼりはじめたではありませんか。

くろいマントがひらひらして、大きな鳥がのぼっていくようです。

みるみるみきをのぼりきって、はのしげったえだの中へかくれてしまいました。

下のえだがガサガサとうごき、その上のえだがうごき、また、その上のえだがうごき、すがたはみえませんが、林さんがだんだん上のほうへのぼっていくのがわかります。そして、とうとうてっぺんまでたどりついたようです。

たけしくんたちはかおをそらにむけて、その大きな木のでっぺんをじっとみつめていました。

しばらくすると、ブルンブルンブルンブルン……と、みょうなおとがきこえてきたではありませんか。

木のでっぺんが大風にふかれているように、ザーツとゆれていきます。

そのとき、そのでっぺんから、大きなくろい鳥のようなものがそらへまいあがりました。

「あらっ、おじさんだわ。おじさんがとんでいくわ」

きみ子ちゃんが、たけしくんのかたに、すがりついてさげびました。

たけしくんは、びつくりしてしまつて、ものもいえません。

大きなこうもりのようです。林さんは、くろいマントをひらひ

らさせながら、たのしそうにとんでいきます。

「あつ、プロペラだ。きみ子ちゃん、あれ、プロペラだよ。」

ほら、林さんのせなかの上で、きらきらひかってまわってるだろう。ヘリコプターとおんなじだ。プロペラのちからでとんでるんだよ」

たけしくんは、そういつて、目をまんまるにしてそらを見つめました。

林さんは、あのプロペラをまわすきかいをせなかくくりつけてとんでいるのでしょうか。そんなべんりなきかいがあるなんて、きいたことありません。

林さんはえらいはつめいかなのでしょうか。

だれもしらないふしぎなきかいをはつめいするので、まほうつかいのようにみえるのでしょうか。

「あらあら、もうあんなに小さくなったわ」

「ほんとだ。もうからすぐらいの大きさだね。いまに、すずめぐらいになつて、そして、みえなくなつてしまふよ」

まつくろなふしぎな鳥は、たかくたかく、そらにまいあがつて、たけしくんがいったとおり、すずめぐらいの大きさになり、それから、ちようちようぐらいになり、はえぐらいになり、そして、とうとうみえなくなつてしまいました。

「どこへ行つたんでしよう。てんにのぼつてしまつて、もうかえつてこないのじゃないかしら」

きみ子ちゃんは、かなしそうなかおになって、なみだぐんでい
ました。

「あつ、あれをござらん」

たけしくんが、きみ子ちゃんのかたをゆさぶりました。

「まあ……」

きみ子ちゃんも、そのほうをみると、あつとおどろいたまま、
ものもいえなくなりました。

さつきの大きな木の下に、林さんがこにこわらつてたつてい
たのです。

いつのまにそらからもどつてきたのでしょうか。ほんとうに、こ
んなふしぎなことつてあるものでしょうか。

「あはははは……。またびつくりしたね。そうじゃないよ。ぼくは林さんじゃないんだよ」

四かくなめがねをかけ、ぴんとはねた口ひげと、三かくのあごひげをはやし、くろいマントをきた、林さんとそっくりな人が、林さんじゃないというのです。

「よくみてごらん。ほら、ぼくはこんなに小さいじゃないか。きみたちとおんなじ小学校の三ねん生なんだよ。でも、林さんによくにてるだろう。そっくりだろう」

なるほど、よくみると、せが小さいのです。こえも子どもです。

「あははは……、まだわからないかい。これがさつきの林さんのまほうのたねなんだよ。こっちへ来てごらん。すっかりたねあか

しをしてやるから」

たけしくんもきみ子ちゃんもさつきからつきつきとおこるふしぎに、ゆめでもみているようなきもちでした。

とてもおもしろいどうわの本でもよんでいるようなきもちでした。

林さんと、そっくりなしようねんが、こつちへ来てごらんというので、ふたりは、おずおずとそのほうへちかよっていきました。「ほらね、これがまほうのたねだよ」

しようねんは、そういって、木のみきのうしろをゆびさしました。

「これが、さいしよにあらわれたにんぎようだよ。ぜんまいじか

けであるくのさ。二十センチぐらいしかないだろう。

それから、あっちにもう一つある。やつぱりぜんまいじかけなんだよ。これは四十センチぐらいあるだろう。二つともあるかせてみようか」

しようねんは、そういつて、二つのにんぎようをもつてきました。

「いいかい、みててごらん」

二つのにんぎようをたてて、せなかのねじをまきますと、二十センチと四十センチの小さい林さんが、足なみをそろえて、ところとあるきだしたではありませんか。

四かくなめがねをひからせ、口ひげをぴんとはねて、くろいマ

ントをひらひらさせながら。

「こうして木のみきにかくれるたびに、だんだん大きいのといれかわっていったんだよ。

そして、三ばんめにあらわれたのが、このぼくだったのさ。

それから、ぼくがこの木のみきにかくれると、そこにまちかまえていた林さんが、すがたをあらわしたというわけだよ。わかつたかい、これがまほうのたねなんだよ」

きいてみるとすっかりわけがわかりました。

「ねえ、さつき林さんがそらへのぼっていったのは、プロペラのしかけでしょう。でも、どこへ行ったのかしら。てんにのぼったまま、かえってこないのかしら」

たけしくんが、しんぱいそうにいいますと、しようねんは、さもおかしそうにわらいだしました。

3

きむらたけしくんと、いもうとのきみ子ちゃんは、まほうつかいといわれる林さんのうちへあそびに行つて、いろいろふしぎなことをみました。

おしまいには、林さんは、たかい木のてっぺんから、こうもりのように、そらへとんでいってしまいました。林さんは、にんげんひとりだけをはこぶプロペラをはつめいしていたのです。

そのあとで、林さんとそっくりのすがたをしたしようねんが、木のうしろからあらわれて、いままでのふしぎなことをいろいろとせつめいしてくれましたが、たけしくんが、

「林さんは、てんにのぼったまま、かえってこないのかしら」といいますと、しようねんは、さもおかしそうにわらいだしました。

「林さんは、もうとつくにうちへかえっているよ。」

むこうのはらっぱにおりて、そのひみつのいり口から、うちへかえったのさ。ぼくたちもはいつてみよう。

うちの中にもふしぎなものがたくさんあるんだよ」

しようねんがそういつてさそいますので、たけしくんときみ子

ちゃんは、しようねんのあとについて、せいようかんの中へはいっていきました。

おもいドアをあけて、うすぐらいげんかんにはいり、ひろいうかをおくのほうへすすんでいきました。

すると、むこうのドアをひらいて、そこからみような人がでてきました。

ぴったりみについた、むらさきいろのビロードのふくをきています。そのかたやむねに、ぴかぴかひかるきんいろのかざりがついています。

あたまにはむらさきビロードの三かくぼうしをかぶっています。サーカスのきよくげいしのようなかっこうです。

よくみると、それは林さんでした。めがねも口ひげもなくなっています。あれはつけひげだったのでしょうか。

「たけしくん、きみ子ちゃん、こつちへおはいり。おもしろいものをみせてあげるよ」

しようねんといっしよに、ふたりがそのへやにはいりますと、林さんは、たんすのひきだしから、きいろの中に、くろいてんてんのあるけがわを二つとりだしました。

「これはひょうのけがわだよ。たけしくんもきみ子ちゃんも、もうじゅうのひょうになってみたいとおもわなにかね。このけがわをきれば、すぐにひょうになれるんだよ。」

目のところにはガラスがはめてあるから、そとがよくみえるし、

口の中には、ふえがついていて、それをふくと、ひようとそっくりのうなりごえがでるんだよ」

それをきくと、たけしくんもきみ子ちゃんも、一どひようになつてみたくなりました。林さんはふたりのかおいろをみて、手ばやくひようのかわをきせてくれるのでした。

けがわはびつたりとみについて、たいへんきもちがいいのです。たけしくんは、へやの中をのそのそとはいまわつてみました。

そしてけがわの口の中にあるふえをふきますと、

「ウォーツ、ウォーツ」

という、おそろしいうなりごえがでるのです。

きみ子ちゃんもかわいいうなりごえがでるのひようになつてたのしそうにあ

るいています。そして、ときどき、ふえをふいているらしく、

「ウォーツ、ウォーツ」

というこえがきこえてきます。

にんげんの足と、ひょうのあと足とは、まがりかたがちがつているのですが、けがわになにかしかけがしてあるらしく、ちよつとみたのでは、それがわかりません。

うつくしいきよくげいしのふくをきた林さんは、どこからかながいむちをとりだして、

「ピシッ、ピシッ」

と、それをならしました。

「おい、たけしひょうにきみ子ひょう。どうだね、もうじゆうに

なつて、たのしいかね」

そうきかれたので、ふたりは、ふえをふいてこたえました。

「ウォーツ、ウォーツ」

「ウォーツ、ウォーツ」

林さんはわらいだしました。

「わははは……。うまいうまい。すっかりひょうになつてしまつたね。ところで、わしはもうじゅうつかいだから、きみたちにげいをさせなければならぬ。さあ、ふたりとも、あと足でたちあがつて……。」

あと足でたちあがつて、ちんちんをするのだ」

そして、ピシーツとむちがなりました。

たけしくんもきみ子ちゃんも、あと足でたち、まえ足をもがもが、やっていきます。

「よろしい。こんどはすこしむずかしいよ。このわの中をとびこえるんだ」

林さんは、どこからかはりがねのわをもちだしてきました。

「ほんとうは、このわにわたをまいて、アルコールをしませて火をつけるんだ。その火のわの中をとびこえるんだよ。」

いまはれんしゅうだから、火はついていない。

いいかい。むこうからはしつてきたいきおいで、この中をとびこすんだ。さあ、しつかり」

そして、むちがくうちゅうで、ピシーツ、ピシーツとなるので

した。

ふたりともいくどかやりそこないましたが、たけしくんは、とうとうわの中をとびぬけることができました。

きみ子ちゃんは、どうしてもできないので、あきらめて、そこへうづくまつてしまいました。

「よし。きようは、れんしゅうはこれまでにしておこう。そして、きみたちをなかまにひきあわせてやるよ」

林さんは、みようなことをいって、ピシーツとむちをならしました。

「さあ、あるくんだ。わしについてくるのだ」

そういって、さきにたつて、ドアのそとにでると、うすぐらい

ろうかを、もつとおくのほうへはいつていきます。

たけしひょうときみ子ひょうは、のそのそとそのあとからついていきました。

ろうかのおくに、とくべつにがんじょうなドアがありました。林さんは、それをひらいて中にはいり、まるでいぬでもよぶように、チョツ、チョツと、したをならしながら、ふた리를手まねきしました。

ふたりは、なんのきもつかず、そこへはいつていきましたが、あつというまに、へんなものの中へおいこまれてしまいました。てつぼうのはまったろうやのようなものでした。

林さんは、ふた리를そこへおいこむと、いり口のとびらにガチ

ヤンとかぎをかけました。

それは、もうじゆうをいれるおりだったのです。みると、そのひろいへやには、たくさんのおりがならんでいました。

そして、それらのおりの中には、ライオンやとらやくまやひょうや、いろいろなもうじゆうが、べつべつにいれてあるのです。まるでどうぶつえんのようでした。

ひょうになつたたけしくんときみ子ちゃんは、そのどうぶつえんのおりの中へいれられてしまったのです。

ふとみると、じぶんたちのいれられたおりのすみに、なにか大きなものが、うずくまっていました。

ピシーツ。おりのそとで、林さんのむちがなりました。

すると、うずくまっていたやつが、ぬくつとたちあがったではありませんか。

とらです。大きなとらです。とらは、「ウォーツ」とうなって、らんらんとかがやく目で、たけしひょうときみ子ひょうをじろつとにらみつけました。

ああ、たけしくんときみ子ちゃんは、大きなとらのいるおりの中へいれられたのです。

ほんとうのひょうなら、とらにまけないかもしれませんがこちらはにんげんの子どもです。とらにかなうわけがありません。

ああ、どうしたらいいのでしょうか。

ふたりは、いまにもとらにいくところされてしまうのではないで

しょうか。

4

たけしくんときみ子ちゃんは、ふしぎな人の、ふしぎなせいよ
うかんの中で、もうじゅうのひよりのけがわをきせられて、ふた
りとも、ひようになつてしまいました。

そして、せいようかんのおくのほうのひろいへやへつれていか
れましたが、そこには、たくさんのどうぶつのおりがならんでい
ました。

そのおりの中には、ライオンやとらやくまや、そのほか、いろ

いろなもうじゅうが、あるきまわったりねそべったりしてしました。

たけしくんときみ子ちゃんの二ひきのひょうも、一つのおりの中へいれられました。ふときがつくと、そのおりのすみに、一ひきの大きなとらがねそべっていました。

その大きなとらは、二ひきのひょうがおりの中へいれられたのを見ると、とてもこわい目で、こちらをにらみつけていましたが、まもなく、のっそりとたちあがって、たけしくんときみ子ちゃんのかけているひょうのほうへちかづいてきました。たけしくんもきみ子ちゃんも、あまりのこわさに、きがとくなりそうでした。ふたりは、だんだんうしろへさがって、おりのすみにびったり

とからだをくつつけましたが、もうそれいじょうはにげられませ
ん。

とらは、のっしのっしとちかよってきます。

そして、らんらんとかがやく目で、ふたりをにらみつけ、きば
のある、まっかな口をがっどひらきました。

「ウォーツ……」

おりがびりびりふるえるような、おそろしいうなりごえでした。
そして、とらのまっかな口が、ふたりのあたまの上から、ぐう
つとちかづいてきました。ああ、もうだめです。ふたりは、いま
にもとらにくわれてしまうのではないでしょうか。

「たすけてくれえっ……」

たけしくんは、しにものぐるいのこえでさげびましたが、けがわをかぶっているの、そのこえが、どこまでとどいたかわかりません。きよろきよろそのへんをみまわしても、きよくげいしのふくをきた、ふしぎな人は、どこへ行ったのか、すがたがみえません。

だれも、たすけには来てくれないのです。

とらの口は、たけしくんのかぶっている、ひょうのあたまの耳のそばにちかづき、あついいきが、耳のあなから、たけしくんのかおにふきつけられました。

とらは、耳たぶににくいいたのかもしれない。

そうして、一ふりされたら、ひょうのあたまがすつとんで、た

けしくんのかおがでてしまいます。

ひようのけがわの中から、にんげんの子どもがとびだしたら、
とらは、いつそうおどろいて、たけしくんのかおにくいつくにき
まっています。

ああ、もうだめです。いよいよたべころされてしまうのです。
そうおもって、たけしくんがきをうしないそうになつていたと
きです。

「おい、しんぱいしないでもいいよ」
どこからか、へんなこえがきこえてきました。

びつくりしてみまわしても、どこにもにんげんなんていないの
です。

とらが、にんげんのことばをしゃべったとしかおもわれません。そんなばかなことがあるでしょうか。

たけしくんはじぶんのあたまがへんになったのではないかとおもいました。きがちがったのではないかと、ぞつとしました。

すると、そのとき。また、耳のそばで、にんげんのかえがきこえました。

「わしもにんげんだよ。にんげんが、とらのけがわをかぶってばけているんだよ。きみたちとおんなじことさ」

やっぱり、とらがしゃべっていたのです。

いや、とらのけがわの中にいるにんげんがしゃべっていたのです。

「なあんだ、ほんとうのとらじゃなかったのか」

たけしくんは、あまりのことがつくりして、そこへたおれてしまいました。

はりつめていたきもちが、一ぺんにゆるんだのです。

とらは、きみ子ちゃんの耳にも、おなじことをささやきました。きみ子ちゃんは、それをきくと、わつとなきだしてしまいました。

いままでは、なくこともできないほどこわかったのです。

そのときです。

ピシッ、ピシッと、ちゅうをきるむちのおとがひびきました。いつのまにか、きよくげいしのすがたをした、ふしぎな人が、

おりのまえにたっていました。

「びつくりさせてすまなかつたね。これが、まほうの国のどうぶつえんなのだよ。

さあ、みんなおりからだしてやるよ。

そして、みんなで、もうじゆうのきよくげいをやるんだ」

そういって、むらさきビロードのふくをきた、ふしぎな人は、ライオンやとらやくまのおりをつぎつぎとまわって、そのとびらをひらくのでした。

ライオンやとらやくまが、おりからとびだして、へやの中をのそのそとあるきはじめました。たけしくんやきみ子ちゃんも、おりのそとにでました。

「だいじょうぶだよ。みんな、もうじゅうのけがわの中ににんげんがはいっているんだからね」

とらが、たけしくんたちの耳にささやきました。

でも、むこうからやって来るライオンをみると、たけしくんたちは、おもわずからだがふるえるのでした。

ライオンの大きなおが、すぐそばへちかよりました。そして、がつと口をひらいて、ウォーツ……とうなつてから、やさしいにんげんのこえで、

「あんしんおし。ぼくもにんげんだよ。きみたち二ひきは、かわい**い**ぼうやとじょうちゃんだつてな。なかよくしようね」

ライオンは、そういつて、えへへ……とわらいました。

ピシッ、ピシッ……。

むちのおとがなりひびいて、ふしぎな人が、ひろいへやのまん中にたちました。

すると、ライオンもとらもくまも、みんなたちどまって、ふしぎな人のほうをじっとみるのでした。

「さあ、いつものきよくげいだ。ライオンの上にくま、とらの上にひょうがのるんだ」

ライオンのせなかにくまがよじのぼって、あと足でたちました。一ぴきのとらのせなかにたけしくんのひょうが、もう一ぴきのとらのせなかにきみ子ちゃんのひょうが、あぶなつかしくあと足でたちました。

ピシツ……と、むちがなります。

すると、くまをのせたライオン、ひょうをのせたとらたちは、ふしぎな人のまわりをぐるぐるまわってはしりはじめるのでした。どこからか、おんがくがきこえてきました。きつと、でんちくがなっているのでしょうか。そのおんがくにあわせて、ライオンととらは、とつとつとははしるのです。たけしくんたちは、だんだんおもしろくなってきました。

それから、いろいろなきよくげいがつづきました。

ああ、まほうの国のどうぶつえんのおもしろさ。たけしくんもきみ子ちゃんも、ゆめでもみているようなおもいででした。

しかし、ふしぎな人のせいようかんには、まだまだもつとふし

ぎなものがありました。たけしくんたちは、このつぎには、いったいなにをみせられるのでしょうか。

5

さんざんあそんだあとで、林さんは、どうぶつにばけている人たちに、かわをぬいで、じぶんのへやへ行つてやすむようにいいつけました。

それから、たけしくんときみ子ちゃんに、ひようのかわをぬがせ、べつのへやへつれていって、「ちよつと、ここでまっているのだよ」といって、どこかへでいってしまいました。

しばらくすると、ドアがあいて、きみのわるい人がはいつてきました。

ぴったりからだにくつついたくらいシヤツと、くろいズボンをつけ、手ぶくろもくつも、あたまにかぶったベレーぼうも、みんなくろづくめです。

よくみると、それは林さんでした。いつのまにか、すっかりちがったすがたになって、もどつてきたのです。

「しんぱいしなくてもいい。わたしだよ。ただ、ちよつとふくをきかえただけさ。さあ、これからもつとおもしろいものをみせてあげようね」

林さんは、そういつて、にこにこわらいました。

すると、そのとき、あけたままになっていたドアから、一ぴきのさるが、ぴよんぴよんとびこんできました。

そのさるは、林さんのからだにとびついて、耳に口をちかづけ、なにかぼそぼそとささやきました。

それは、さつき、サーカスごっこをしたどうぶつたちの中にいたさるでした。ですから、ほんとうのさるではなくて、さるのかわをきたにんげんです。

それも、あまり大きなさるではありませんから、中にはいつているのは、小さい子どもにちがいません。

さるがなにをささやいたのか、たけしくんたちにはすこしもきこえませんでしたが、それをきくと、林さんはこわいかおになり

ました。

そして、

「なにっ、あけちたんていと小林こばやししようねんがやって来たつて。

そして、けいかんたいが、このうちをとりかこんだというのか。

それはほんとうかつ」

とどなりました。

「ほんとうです。はやくにげないと、いまにもここへやって来ますよ」

さるが、こんどはかんだかいこえでいいました。やっぱり子どもものこえです。

「よしっ。それじゃ、さいごのおくの手だ。あとはたのんだぞ。

やつらが来たら、わしはどこへ行つたかわからないというのだ。このふたりの子どもは、わしがつれていく。だいじな人じちだからな」

くろいすがたをした林さんは、たけしくんときみ子ちゃんの手をひっぱって、へやのそとへとびだしました。

たけしくんたちは、さるのいったことをきいて、たいへんだとおもいましたが、あい手はちからのつよいおとなですから、どうすることもできません。なくても、わめいても、だれも、たすけに来てくれるものはないのです。

林さんは、ふたりの手をひっぱって、ろうかをはしつていきましたが、じきにろうかの行きどまりまで来てしまいました。

そこには、かべがあつて、もうむこうへ行けませんから、あともどりするのかとおもつていますと、林さんは、足で、かべの下のほうをぐつとおしました。

そこに、ひみつのボタンがあつたのです。

そのボタンをおすと、でんきじかけで、かべがすうつとひらくようになつていたのです。そして、まえのかべに、ぽっかりとくらいあながあきました。

林さんは、たけしくんたちの手をにぎつたまま、そのまっくらなあなの中にはいつていきます。

三人が中にはいると、かべは、もとのようにぴつたりとしまつてしまいました。

「しんぱいしなくてもいいよ。きみたちをどうもしないからね。さあ、おじさんがだいてやるよ。くらくて、足もとがあぶないからね」

林さんは、そういつて、たけしくんときみ子ちゃんを、りようわきにかかえるようにしてだきあげたかとおもうと、まつくらなかいだんのようなところをことごとおりはじめました。

いままでいたへやは一かいですから、そこからかいだんをおりれば、ちのそこへはいつていくのです。ちかしつでしようか。

まつくらで、なにがなんだかわかりませんが、林さんは、かいだんをおりたところで、たけしくんたちをおろしました。そして、なにかごそごそやっていましたが、きゆうに下のほうから、ぱっ

とひかりがさしてきました。

足の下に、さしわたし五十センチほどの、まるいあながあいて、その下から、あかるいひかりがさしているのです。

「さあ、ここをおりるんだ。このあなの中に、つつのはしごがかかっているから、それをおりなさい。おじさんは、あとからはいるからね」

もうここまで来ては、にげようとしても、にげられるものではないありません。

いわれるままにあなの中へおりていくほかはないのです。たけしくんときみ子ちゃんは、ほそいてつのはしごに足をかけて、あかるいあなの中へおりていきました。

ひどくせまいへやです。へんなきかいのようなものが、ごちやごちやとならんでいて、どちらへもいけないのです。いったいここはどこなのでしょう。

あたまの上で、パタンとおとがしました。林さんが、てつばしごとをおりながら、まるいあなのふたをしめたのです。しめたばかりではありません。あなのまわりについている、大きなてつのはじをぐいぐいしめつけて、かたくふたをしてからおりてきました。

「はははは……。びっくりしているね。いまにわかるよ」

林さんは、そういつて、ごちやごちやしたきかいの中へはいつていつて、そこにある、小さなすにこしかけました。すると、へやがゆらゆらとうごいて、なんだか、エレベーターにでもものつ

ているようなきもちになりました。

「いいかい。いま、中のでんきをけして、そとのでんきをつけるからね。そうすると、おもしろいものがみえるよ」

しばらくゆらゆらとゆれていたあとで、へやのでんきがぱつときえて、すぐ目のまえの四かくなガラスまどのそとが、ぼうつとあかるくなりました。

ああ、ごらんなさい。そのひかりの中をなん十ぴきという小さなさかなが、ぎんいろのうろこをぴかぴかさせて、およいでいるではありませんか。これは、どうしたというのでしょうか。ここはすいぞくかんなのでしょうか。それとも……。

6

いやそれはすいぞくかんでありません。もっともつと、びつくりするようなものだったのです。

そのとき、くろシャツにベレーぼうの林さんは、たけしくんたち、こんなことをいいました。

「おじさんは、ちよつと上へ行つてくるからね。ここにじつとしているんだよ。ちつともこわいことはないからね」

そして、また、へやがゆらゆらゆれて、やがてぴたりととまりました。

すると、まどの外の光がきえて、へやの中のでんとうがつきま

した。

林さんは、あたまの上のまるいあなのしまりはずして、そこから上へでていきました。あとには、たけしくんたちふたりだけがのこったのです。

ああ、これからどんなことがおこるのでしょうか。

林さんのせいようかんには、おおぜいのおまわりさんがふみこんで、へやからへやをさがしまわっていました。

めいたんていあけちごろうと、じよしゆの小林しようねんは、林さんのへやにはいつて、あたりを見まわしました。すると、かべのそばにある、大きなようふくだんすの中で、コツコツと、みような音がしているではありませんか。

あけちたんていは、つかつかと、ようふくだんすにちかづいて、そのとびらをぱつとひらきました。

すると、その中に、ひとりの男がたっていたのです。ぴつたりとからだについた、くろいシャツとズボン下に、ベレーぼうをかぶった男。

林さんです。林さんは、いつのまにか、ようふくだんすの中にかくれていたのです。

「ははははは……。あけちくん、ひさしぶりだね。やっと、おれのかくれががわかった、というわけか」

林さんが、みようなことをいいました。

「そうだ。ぼくは、とうとうかいじん二十めんそうのすみかをつ

きとめたのだ。それとも、かいじん四十めんそうとよんだほうがおきに
いるかね」

あけちたんていは、林さんのかおをまつこうからゆびさしながら、はげしく
いいました。

ああ、なんということでしょう。たけしくんのおとうさんが、いい人だと
あんしんしていた林さんが、きくもおそろしいかいじん四十めんそうだ
ったとは。

このかいじんは、へんそうのだいめいじんで、四十もちがったかおをも
っているというので、四十めんそうとあだ名されていたのです。まほうつか
いのような大どろぼうです。

「木村^{きむら}たけしくんときみ子ちゃんは、どこにいるのだ。きみは、

ふたりの子どもを人じちにして、木村さんのもっている、たくさんのほうせきをとろうとしているのだ。木村さんが、きみをしんようしているのをいいことにして、ふたりの子どもをさらってしまつたのだ」

あけちたんていがいいますと、四十めんそうの林さんはせせらわらつて……。

「そのとおりだ。さすがにあけちくんは目がたかいよ。ははは……」

そのわらい声がだんだんかすかになつて、四十めんそうのすがたは、すうつときえていききました。

あけちたんていは、いきなりようふくだんすの中へふみこみま

した。

しかし、四十めんそうは、もうどこにもおりません。ゆうれいのようにきえてしまったのです。

あけちたんていは、たくさんさがっているようふくをかきわけて、うしろのいたをさぐっていました。 「あつ、ここにかくし戸がある」とさげびました。

そして、力まかせに、そのいたをおしますと、かくし戸がぱつとひらきました。

そのむこうはまつくらなあなです。これも、ちかしつへおりるひみつのぬけ道なのでしょう。

「ピリピリピリピリ……」

小林しようねんが、よび子のふえをふきならしました。それをきいて、おまわりさんがかけつけてきました。

「四十めんそうは、このぬけあなからにげたんだ。みんな、ぼくのあとについてきたまえ」

あけちたんていは、そうさけんで、くらいあなの中へとびこんでいきました。小林しようねんやおまわりさんも、あとにつづきます。

あなの中には下へおりるコンクリートのかいだんがついていました。

それをおりきると、トンネルのようなよこ道があつて、むこうが、ぼうつとあかるくなっています。

その光の中を、まっくらな人がげがさつとよこ切りました。

「あつ、あそこにいる。あいつが四十めんそうだ」

あけちたんていと小林しようねんと、四人のおまわりさんが、おそろしいいきおいでおっかけました。

トンネルをでたところに、ちよつとひろいばしよがあります。

四十めんそうは、そこにまちかまえていました。

「ふたりの子どもは、たしかにあずかっている。だが、きみたちには、ぜつたいにとりもどせないのだ」

四十めんそうは、そうさけんだかと思うと……。

足もとにひらいていたまるいあなの中にさつととびこんで、下から、てつのふたをぴったりとしめてしまいました。

あけちたんでいは、「あつ」といって、あなのふちへかけつけました。

すると、てつのふたは、すうつと下へしずんでいって、あとには、くろい水が、ひたひたとさざなみをたてているばかりです。

「あつ、せんこうていだつ」

林さんのひろいやしきは、すみだ川とうきようこうのさかい目の川ぎしにあつたのです。ですから、ちかしつの下のほうには、川の水がながれこむようになっていて、そこに、小がたのせんこうていがつないであつたのです。

四十めんそうは、たけしくんときみ子ちゃんをつれて、そのせんこうていで、ひろい海へにげだしてしまったのです。

7

あけちたんていは、へやの中へはいつて、すいじょうけいさつへでんわをかけました。

すると、とくべつなモーターボートをかしてくれろというへんじでした。

川ぎしでまっっていると、小さいモーターボートが、なみをけたててちかづいてきました。

きしにつくと、中から、すいじょうけいさつのおまわりさんがでてきました。

「これは、ちかごろできたばかりの、とくべつなボートです。ボートのそこから、水の中がのぞけるようになっていのです」

おまわりさんはじまんそうにいうのでした。

あけちたんでいと小林しようねんが、そのモーターボートにのりこみました。そして、すぐにとうきようこうのほうへしゅっぱつしました。

「いま、でんとうをつけますから、ここをのぞいてごらんなさい」
おまわりさんは、そういつて、ボートのそこの四かくいふたをとりました。すると、そこには、四かくいはこのようなものが、下の水の中へつきだしていて、そのさきにガラスいたがはめてあるのです。のぞいていると、そのガラスの下が、ぱつとあかるく

なりました。

ボートの下に、サーチライトみたいな、つよいでんとうがついていて、水のそこををたらすようになっていのです。

すいじょうけいさつでは、川におちた人をさがさなければならぬことがあるのでこういうモーターボートをつくったのです。

「わあ、きれいだ。さかながたくさんおよいでいる」

小林しょうねんがさげびました。

「四十めんそうのせんこうていは、きつと、ペリスコープを水の上にだして、すすんでいるにちがいない。」

そのペリスコープのさきを見つければいいのだ」

あけちたんでいいいますと、すいじょうけいさつのおまわり

さんは、すぐにボートのへさきの、サーチライトのスイッチをいれました。

さあつと、つよい光が水の上をてらしました。

そこは、もう、とうきょうこうのひろい海です。

ボートは、サーチライトを右に左にふりてらしながら、ゆつくりすすんでいきます。

「あつ、先生。あそこにペリスコープのさきが……」

小林しょうねんが、むこうをゆびさしてさげびました。

ボートは、ぜんそくりよくで、そのほうへすすみました。

すると、すいめんにでていたペリスコープのさきが、すうつと、水の中へかくれてしまったではありませんか。

「あつ、四十めんそうのやつ、きづいたな。よしつ、それじゃ、こんどはすいちゆうめがねだ」

あけちたんていの声にこたえて、ボートのそのサーチライトが、ぱつとすいちゆうをてらしました。

ボートは、さつき、ペリスコープのかくれたあたりへちかづいていきます。

やがて、ボートのそのすいちゆうめがねに、まっくろなせんこうていのすがたがあらわれました。

「よしつ、この下にいる。どこまでも、こいつのあとをおつていくのだ」

あけちたんていが、モーターボートのきかんしゆによびかけま

した。

こちらは、せんこうていの中です。

ぴったりみについたくろシャツとベレーぼうのかいじん四十めんそうは、ペリスコープのつつに目をあてて、水の上のようすをながめていましたが、ぱつと、サーチライトの光が見え、それがこちらをおっているように思われたので、いそいで、ペリスコープをひきさげてしまいました。

サーチライトの光がつよいので、モーターボートにだれがのっているのか、よく見えませんが、ひよつとしたら、あけちたんていがおっかけてきたのかもしれない、と思いました。

「わははは……。おもしろくなってきたぞ。おい、たけしもきみ

子も、いまにびっくりするようなことがおこるから、まっ
たがいい。わはははは……」

たけしくんもきみ子ちゃんも、とつぜん、四十めんそうがわ
らいだしたので、きみがわるくなってきました。ふたりは、だきあ
うようにして、せんこうていのきかいの中にうずくまっていま
した。

せんこうていは、しばらくのあいだ、ぜんそくりよくで走つて
いましたが、やがて、だんだんおそくなり、ぴったりとまっ
てしまいました。

「ぼうやたち、さあ、ついたよ。ここは小さなしまの一つだよ。
きしの下をつきぬいて、せんこうていがすっぽりはいれるように

してあるのだ。そこから、わけなくじょうりくできるようにもなっている。だが、そこへはいるまえに、ちよつとうしろをのぞいてみよう。てきがおつかけてきているんだからな」

四十めんそうはそういつて……。

ペリスコープのつつをすうつと上にあげて、のぞきあなに目をあてました。

「おや、なんにもいないぞ。あけちのやつ、あきらめてひきあげてしまったのかな。いや、まてまて、ゆだんはできないぞ……」

四十めんそうは、ながいあいだペリスコープをのぞいていましたが、いつまでたつてもモーターボートがあらわれないので、やつとあんしんしました。

せんこうていを、きしの下のほらあなにいれ、てつのとびらをひらいて、三人ともじょうりくしました。土のあなからはいだすと、そこは、草ぼうぼうのしまでした。

「ほら、あれをごらん。水のそこから、こんどは空へのぼるんだよ」

四十めんそうのゆびさすほうを見ると、むこうのやみの中に、一だいのヘリコプターがとまっているのが、かすかに見えました。

8

あたりはまっくらです。やみに目がなれると、むこうのほうに、

ヘリコプターがとまっているのが見えました。

「あれにのるんだよ。そして、いいところへ行くんだ」

四十めんそうは、そういつて、ふたりの手をひいて、ヘリコプターにちかづいていきました。

ヘリコプターのそうじゅうせきには、四十めんそうのぶかの男がのつていて、いつでもとべるようになっていました。

三人は、ヘリコプターにのりこみました。すると、ブルンブルンと、プロペラがまわりだし、ヘリコプターは、しずかにじめんをはなれて、空にうきあがりました。

ヘリコプターは、しまの上をはなれて、やみの中を、どこともしれずとんでいきます。ちかくのはねだひこうじょうのあかるい

でんとうが、だんだんうしろへとおぎかつていきます。

しばらくすると、四十めんそうが、びつくりしたようにさげびました。

「おやつ、どうしたんだ。なぜ、もとへもどるんだ」

見ると、いちどとおぎかったはねだひこうじょうのでんとうが、また、ちかづいてきたのです。ヘリコプターは、もとへもどつてきたのです。「よいができたからですよ」

ヘリコプターをそうじゆうしているぶかの男が、みようなことをいいました。

「えっ、なんだって。なんのよいができたというんだ」

「きみをつかまえるよいができたんだよ。ほら、この下を見た

まえ」

いつのまにか、ヘリコプターは、もとのしまにもどっていました。そして、そこには、モーターボートから、もちだしたたんしように、あかるい光をなげ、その中にも、おおぜいのおまわりさんがたっているのが見えました。

四十めんそうは、「あつ」とおどろいて、そうじゆうしている男のせなかを見つめました。

「き、きみは、なにものだ」

「ははははは……。ぼくはあけちだよ。きみよりさきに、このしまにじょうりくして、きみのぶかにばけてまっていたのさ」

ほんとうのぶかは、手足をしばり、さるぐつわをはめて、草む

らの中へころがしておいたのです。

そして、その男の上うわぎをき、とりうちぼうしをかぶって、四十めんそうのぶかにばけていたのです。

「き、きさま、どうするか見ろっ……」

四十めんそうは、りよう手をひろげて、あけちたんていのうしろからおそいかかろうとしました。

そのときです。ヘリコプターのすみにおいてあつた大きなにもつが、むくむくとうごきだしたではありませんか。

そのにもつの中から、ひとりのしようねんがあらわれました。

「おいつ、四十めんそう、手をあげるんだ。そうでないと……」

しようねんは、ピストルを四十めんそうのせなかにあてて、ぐ

いぐいとおしつけるのでした。

四十めんそうは、思わずりよう手を上にあげてふりむきました。

「あつ、きさま、小林だなっ」

それは、あけちたんていのじよしゆの小林しようねんだつたのです。

さすがの四十めんそうも、ピストルをつきつけられてはどうすることもできません。そのまま、ヘリコプターは、しまにちやくりくしました。

まちかまえていたおまわりさんたちが、四十めんそうをつかまえて、パチンと手じようをはめてしまいました。

四十めんそうは、おまわりさんたちにとりかこまれて、モータ

ーボートにのせられました。

あけちたんでいと小林しょうねんは、ヘリコプターの中でふるえているたけしくんときみ子ちゃんをたすけて、おなじモーターボートにのりこみました。

ふたりの子どもを人じちにして、木村さんのほうせきを手にいれようとした四十めんそうは、とうとうつかまってしまったのです。

モーターボートは、しまをはなれて、とうきようこうから、すみだ川のほうへすすんでいきました。

四十めんそうは、手じようをはめられて、ボートのかんぱんにうづくまっていました。そのまわりをおまわりさんがとりかこん

でいます。

「おい、きみたち、おれが海の中へとびこんだら、どうするつもりだ」

四十めんそうが、みょうなことをいいました。

「そりや、だめだよ。手じようをはめられては、およげやしない。海のそこへしずんでしまえばかりだよ」

おまわりさんがそういうと、四十めんそうは、いきなりわらいだしました。

「あはははは……。この手じようかい。こんなものはずすの、わけないよ。おれが、手じようやぶりのめいじんだということをしらないのか」

パチンと音がして四十めんそうのりよう手から、手じようがはずれてしまいました。そして、あつというまに、四十めんそうのすがたは、かんぱんからきえていました。

まっくらな海の中へとびこんでしまったのです。

9

二十めんそうのゆくえ

かいじん四十めんそうは、夜の東京港で、

水すいじょう上じょうけいさつの

モーターボートの上から、海の中にとびこんで、そのままゆくえ
知れずになってしまいました。

かいじん四十めんそうのもとの名は、かいじん二十めんそうで
す。あるとき、自分は、二十どころではなく、四十ものちがった
顔をもっている、四十人のまったくちがった人に化けることができ
るといので、四十めんそうと名まえをかえたのですが、世間^{せけん}
には、二十めんそうのほうが、よく知られていますので、このお
話では、二十めんそうの名でよぶことにしましょう。

さて、この二十めんそうは、いったいどこへかくれてしまった
のでしよう。二十めんそうほどのやつですから、海でおぼれ死ん
だはずはありません。どこかへおよぎ着いて、身をかくしたにち

がないのです。

しかし、二十めんそうにつれ出された、木村たけしくんときみ子ちゃんが、ぶじに帰ってきましたので、木村さんのおうちでは、おとうさんもおかあさんも、大よろこびです。

「たけしも、きみ子も、ずいぶんおそろしいめに会ったね。だが、もうだいじょうぶだよ。二十めんそうは、どこかへかくれてしまつて、二度とこの家にはやつて来ないだろうからね」

たけしくんときみ子ちゃんのおとうさんの木村さんは、ふたりの頭をなでながら、にこにこしているのです。

「こわかったよ。でも、おもしろかったね、きみちゃん。ヘリコプターに乗ったし、モーターボートに乗ったし……。モーターボ

トは、はやかったねえ。さあつと水を切つて走るんだよ。あんまりはやいので、ぼく、もうすこしで、気が遠くなりそうだった」
 「でも、わたし、おそろしかったわ。もうむちゆうで、なにがなんだか、わからなかったわ」

きみ子ちゃんは、おびえた顔でいうのでした。

「そうだろう、そうだろう。ほんとうにひどいめに会ったね」

木村さんは、かわいいきみ子ちゃんをだきしめて、なぐさめてくださるのでした。

☆

☆

それから一月ほどたったあるばんのこと、名めいたんてい明あけち智こご小五郎ろうから、木村さんに、電話がかかってきました。

「しきゆう、お話ししたいことがありますので、わたしのじむ所しょまで、おいでねがえませんか。こちらからうかがうといいのですが、ちよつと、わけがあつて、じむ所をはなれることができないのです」

木村さんは、それを聞くと、すぐに自動車の用意をめぐらしました。明智たんていは、たけしくんときみ子ちゃんを助けてくれた大おんじんですから、来てくれといわれれば、いやとはいえないのです。

自動車は、自家用車です。うんてん手は、まだおよめさんのないひとり者で、木村さんの家に住みこんでいたのですが、つい四五日前、国の親が病氣だといってひまを取って帰ってしまいました

たので、新しいうんてん手をやとったばかりでした。

この新しいうんてん手も、二十八さいのひとり者で、やっぱり、木村さんの家に住みこんでいるのです。名まえは、栗田くりたというのでした。

木村さんは、その栗田のうんてんする車に乗って、急いで、明智たんていじむ所へ出かけていきましたが、二時間ほどすると、もどってきました。そのときは、もう、夜の十一時でした。

たけしくんや、きみ子ちゃんは、とつくにねてしまいましたがおかあさんが、書しよせい生といっしよに出むかえて、心配そうに、木村さんにたずねました。

「あなた、どんな用でしたの。もしや、二十めんそうが……」

「うん、そうだよ。二十めんそうが、またなにかたくらんでいるらしいのだ。それについて、明智さんから、うちのほうせきを用心するようと、いろいろ、細かい注意をされてきたのだ。いやなことだな。なんという、しゅうねん深いやつだろう」

おかあさんの顔が、さつと青くなりました。ああ、また、あのおそろしいやつがやって来るのかと思うと、からだがふるえだしてくるのです。

おそろしい目

そのあくる日から、木村さんの家には、げんじゆうな見はりが

立ちました。木村さんのところのふたりの書生と、うんでん手の栗田のほかにも、明智たんていのぶかだというふたりの男がやって来て、五人で、かわるがわる、昼も夜も、木村さんの家のうち外を見回って歩くのでした。

たけしくんときみ子ちゃんは、それを聞いて、ふるえ上がってしまいました。また、あんなめに会うかもしれないと思うと、おそろしくてたまりません。

たけしくんときみ子ちゃんの学校へ行くときは、書生がついていくことになりました。それに、昼間にぎやかな町を通るのですから、学校の行き帰りは、まず、だいじょうぶでした。

おとうさんの木村さんは、ひとま一間にとじこもったきりで、なにか

考えごとをしていて、ごはんも自分のへやに運ばせ、茶の間には、すがたを見せないのです。

ですから、たけしくんやきみ子ちゃんは、おとうさんの顔を見ていません。

ところが、おとうさんが、明智たんていじむ所へ行つてからふつかめのことです。

たけしくんは、夜おそく、お手あらいへ行つた帰りに、ろうかで、ひよっこり、おとうさんに出会いました。

おとうさんは、わふくすがたで、うす暗いろうかを、こちらへ歩いてきたのですが、たけしくんのすがたを見ると、はつとしたように立ち止まって、じっとたけしくんの方を見つめているので

す。

たけしくんも、それにつられて立ち止まってしまいました。そして、こちらも、じつとおとうさんの顔を見つめました。

木村さんの目は、おそろしくぎらぎら光っていました。ぞつとするような、こわい目です。

それは、おとうさんにちがいないのですが、なんだか、えたいの知れないかいぶつにでも出会ったようで、すこしも親しみがなく、ただ、おそろしいばかりでした。

たけしくんは、しばらくにらみあっていたあとで、そのままものもいわないで、にげるように自分のへやへかけこんでしまいました。

「へんだなあ。おとうさんが、あんなおそろしい顔をしているのは、はじめてだ。おとうさんは、病気なのかしら。それとも……」
たけしくんは、ベッドにはいつて、そのことばかり考えていました。あのおとうさんのこわい目が、どうしてもわすれられなかったのです。考えているうちに、だんだんおそろしくなつて、からだだが、がたがたふるえてくるのでした。

そのあくる日、たけしくんは、学校へ行つても、おとうさんのこわい目のことばかり考えていました。

学校から帰つても、やっぱりおとうさんのことが気にかかるので、そつと、おかあさんにたずねてみますと、おかあさんも、へんな顔をして、

「パパは、しよさいにいますよ。どうなすったのかしら。だれも来てはいけないうつて、へやをしめ切つて、とじこもつていらつしやるのよ」

といわれるのでした。

たけしくんは、しよさいへ行つてみました。そして、ドアの外から、「パパ」とよんでみました。しかし、返事がありません。ドアをあけようとしたが、中からかぎがかけてあるらしく、すこしも動きません。

「パパ……、パパ……」

二度も三度もよびましたが、なんの答えもありませんので、たけしくんは、ドアのかぎあなに目を当てて、中をのぞいて見まし

た。

すると、しよさいにおいてある金庫の前にうずくまっているおとうさんの後ろすがたが見えました。

金庫のとびらが、開いています。そのとき、おとうさんが、すこしよこ向きになったので、手に持っているものが見えました。

それは、金色のほうせきばこでした。そのはこが開いて、美しいほうせきが、きらきらとかがやいているのが、こちらからも見えしました。

なんだか、へんです。おとうさんが、まるでどろぼうみたいにな、人目をしよのうすすんで金庫を開き、ほうせきばこを取り出してながめている様子ようすが、どうもへんです。

たけしくんは、それを見て、はっとしたひょうしに、思わず、カタツと音をたててしまいました。

すると、その物音を聞きつけたおとうさんが、ひよいとこちらを向いたのです。

ああ、その目……。

へびのような、きみの悪い目が、ドアのかぎあなを見つめているのです。その外から、たけしくんがのぞいていることを、ちゃんと知っているのかもしれない。

たけしくんは、ぞうつとしました。おとうさんが、あんなきみの悪い目をしているはずがないと思いました。ひよつとしたら、あれは、ほんとうのパパではなくて、なにかおそろしいまものが、

パパに化けているのではあるまいかと思いました。

たけしくんは、そのまま、かぎあなの前をはなれて、自分のへやににげ帰りましたが、むねがどきどきしました。けれど、このことは、だれにも話せません。おとうさんが、まものだなんて、きみ子ちゃんにも、おかあさんにも、いえないのです。たけしくんは、どうしたらよいのか、わけがわからなくなりました。

たけしくんのおとうさんは、いったい、どうしたのでしょうか。まものにみいられたとでもいうのでしょうか。それとも……。

そこには、じつにおそろしいひみつがかくされていたのです。そのひみつが、少年たんでいだんの力でわかつてくるのです。

そして、いよいよ、名たんでい明智小五郎や小林少年の大かつや

くが始まるのです。

10

ポケット小^こぞう

かいじん二十めんそうが、たけしくんときみ子ちゃんのおとうさんのほうせきをねらっているというので、たけしくんの家では、いつも、げんじゆうな見はりがついていました。

木村さんの書生がふたり、うんてん手の栗田、それから、明智

たんていのぶかの男がふたり、ぜんぶで五人が、こうたいで、家の外と中を見回っているのです。

木村さんは、一間にとじこもったきり、なにか考え事をしていきます。おとうさんの、そんな様子を、たけしくんは、ふしぎに思いました。

いつものおとうさんと、まるでちがっているのです。

ゆうべ、夜おそく、手あらいに行つたとき、ろうかで、おとうさんに出会いましたが、おとうさんは、ものもいわないで、おそろしい目で、たけしくんをにらみつけました。

おとうさんのそんなおそろしい目を見たのははじめてなので、たけしくんは、すっかりおびえてしまいました。

そのほかにも、まだ、いろいろあやしいことがあったのです。たけしくんは、そのあくる日の夕方、ひとりで、門の外に立っていました。おとうさんの様子を考えると、じつとしていられないような気持きもちになったからです。

門の前に立って、だんだん暗くなつていく夕ぐれの町を、ぼんやりとながめていると、向こうの町かどに、ひよいと人のすがたがあらわれました。中学の二年か三年ぐらいの少年です。その少年が、こちらを見て、手まねきしているのです。

「ぼくですか……」

たけしくんは、思わず、大きな声で聞き返しました。

すると、少年は、しっ、というように、口の前に指を立てて、

そつと、こちらへ近よつてきます。にこにこした、上品な少年です。たけしくんも、思わず、その方へ歩いていきました。

「あつ、小林さん……」

たけしくんは、なつかしそうに、少年のそばにかけよりました。それは、名たんてい明智小五郎の助手じよしゆの小林くんだったので。へりコプターの中にかくれていて、たけしくんたちを助けてくれた、あの小林くんだったので。

「きみが、どうしているかと思つて、様子を見に来たんだよ。ベつに、かわつたことはないかい」

そこで、たけしくんは、おとうさんが明智たんていじむ所へ出かけていったこと、帰つてきてから、まるで人がかわつたように、

ものをいわなくなつたこと、一間にとじこもつて、こわい顔をしていることなどを、小林くんに話しました。

小林くんは、これを聞くと、じつと考えていましたが、やがて、「これには、なにか、わけがあるらしいね。よしつ、ぼくは、すぐにしむ所へ歸つて、明智先生にそうだんする。そして、きみたちをまもつてあげる。ちつとも心配することはないよ」

といつて、たけしくんのかたをたたくと、そのまま、夕やみの中へかけだしていつてしまいました。

それから、一時間ほどたつたところです。あたりは、もう、すっかり暗くなつていましたが、木村さんの家のへいの外を、黒いものが、ちよろちよろと動いていました。

暗くてよくわかりませんが、なんだか、六つか七つぐらいの小さな子どものようでした。その子どものすがたが、まだ開いたままの木村さんの門の中へ、すうつと、すべりこむようにはいつていきました。

その子どもは、いったい、なに者だったのでしょうか。むろん、小林くんではありません。もつと、ずっと小さい子どもです。

あつ、そうです。少年たんでいたんの、ちんぴらたいのポケット小ぞうにちがいありません。

ポケット小ぞうというのは、ポケットにはいるほど小さいというので、こんなあだ名をつけられたのですが、からだは小さいけれども、じつにすばしっこい、りこうな少年です。

そのポケット小ざうが、木村さんの家へしのびこんだのです。かれは、いつたい、なにをするつもりなのでしようか。

きえたほうせき

さて、その夜の八時ごろのことでした。しよさいにとじこもっている木村さんのところへ、どこからか電話がかかってきました。木村さんは、その電話を聞くと、顔色をかえて、ガチャンと受^じ話^{ゆわ}きをかけ、あわてて、よびりんをおすのでした。

けたたましいベルの音に、ふたりの書生がかけつけました。

「はい、なにかご用ですか」

「すぐに、明智たんていじむ所の人をよんでくれ。二十めんそう
だ」

「えっ、二十めんそうが……」

「二十めんそうが、電話をかけてきたのだ。早くよんでくれ」

書生が、急いで、明智たんていのぶかの、ふたりの男をつれて
きました。

「木村さん、二十めんそうから電話がかかったそうですが」

ぶかのひとりが、いきせき切って、たずねました。

「そうです。あいつからかかってきたのです」

「どんなことをいつてきたのですか」

「今夜、わたしこんやのほうせきを取りに来るといいます」

「えっ、今夜、ほうせきを」

「そうです。わたしのほうせきは、ぜんぶ、ほうせきばこにおさめて、その金庫に入れてあります。それを、今夜の十時きっかりに、ぬすみ出してみせるといなのです」

「そんなばかな。そんなことができるはずはありません。わたしたちがふたり、書生さんがふたり、うんてん手の栗田くん、それに、木村さんをくわえて六人です。六人が、このへやでがんばって見はっていれば、いくら、かいじん二十めんそうでも、ぬすみ出せるわけがありません」

「わたしも、電話で、そういつてやったのです。すると、二十めんそうはせせらわらいました。そして、見はりが多ければ多いほ

ど、おもしろい。いくら見はつていても、かならずぬすみ出してみせるといって、電話を切つてしまいました。まほう使用のようなやつですから、ゆだんできません」

木村さんは、青ざめた顔で、心配そうにいうのでした。

それから、六人の見はりが始まりました。だれも、へやを出るものはありません。六人とも、いすにかけて、じつと金庫を見つめています。

まどは、ぜんぶしめて、かけ金をかけ、二つのドアも、げんじゆうにしめて、中からかぎをかけてしまいました。

「しかし、木村さん。ほうせきは、たしかに金庫の中にはいつているのですか。もう、とつくに、ぬすまれているではありません

んか」

明智たんていのぶかが、うたがわしげにいいました。

「ねんのために、しらべてみましょう」

木村さんは、そういつて、かぎで金庫を開き、金色のほうせきばこを取り出して、テーブルの上におきました。

「はこはあつても、中のものがなくなっているかもしれない。開いてみます」

木村さんが、ほうせきばこを開くと、その中の黒いビロードのぬのの上に、首かざり・うでわ・指わ・耳かざりなどにちりばめた、ダイヤモンド・ルビー・サファイア・エメラルド、そのほか、あらゆるほうせきが、きらきらとかがやいているのです。

「一つもなくなつてはいません。では、元のように、金庫の中におさめます」

木村さんは、ほうせきばこのふたをしめ、それを金庫の中にしまつて、かぎをかけました。

そして、また、六人は、じつと金庫を見つめていましたが、やがて九時になり、九時半になり、九時五十分となり、とうとう十時になりました。

「いま、ちょうど十時です。二十めんそうは、やって来ませんでしたね。もう、だいじょうぶです」

明智さんていのぶかがいますと、

「いや、まだ安心はできません。あい手は、まほう使いですから

ね。ひとつ、金庫を開いて、あらためてみましょう」

木村さんは、そういうと、金庫の前へ行つて、かぎで、とびらを開き、金色のほうせきばこをテーブルの上に持つてきて、そのふたを開きました。

「あつ」

みんなの口から、おどろきのさげび声が、ほとばしりました。

ごらんなさい。——ほうせきばこの中は、すっかりからっぽになつていてありませんか。ああ、これは、いったい、どうしたというのでしょうか。

黒いおばけ

たけしくんと、きみ子ちゃんのおとうさんの木村さんは、金庫の中から、ほうせきばこを取り出して開いてみますと、中は、からっぽになっていました。

二十めんそうが、いつの間にか、ぬすみ出してしまったのです。木村さんのほかに、明智たんていのぶかや、書生や、うんてん手など、五人の人が、そのへやの中で、目をさらのようにして見はっていたのです。その目の前で、ほうせきが、ほうせきばこの

中からきえうせてしまったのです。いったい、二十めんそうは、どんなまほうを使ったのでしょうか。

木村さんをはじめ、みんなは、あまりのふしぎさにぼんやりしてしまつて、金庫の前につつ立っていました。

すると、そのときです。大きな金庫の後ろから、ぴよんと、まつ黒なものごとび出してきました。小さなお化けです。まつ黒なシャツとズボンをつけ、頭は、黒ふくめんずつつんで、目と口のところだけ、あながあいています。頭のとつぺんから足のつま先まで、まつ黒な子どもみたいなやつです。

その小さなお化けが、ぴよん、ぴよんと、木村さんにとびかかつてきました。そして、すばやく、木村さんのうちポケットに手

を入れたかと思うと、中から、ぴかぴか光るものをつかみ出して、ぱつと、向こうへとびのいてしまいました。

「ほうせきは取りもどしたから、安心しな。さあ、こいつをつかまえるんだよ。こいつは、ほんとうの木村さんじゃない。二十めんそうが化けているんだよ。早く、こいつを……」

黒いお化けが、子どもの声でさけびました。

しかし、みんなは、そんなお化けのいうことはしんようできないので、ためらっていますと、木村さんが、いきなり、かけだして、へやの外へ出ていってしまいました。

「あつ、にげた。早く追っかけるんだ」

小さなお化けが、またさけびました。

みんなは、木村さんがにげだしたのを見ると、お化けのいうことがほんとうだ、と思いました。それに、木村さんのうちポケットから、ほうせきが出てきたのが、なによりのしよこです。みんなは、二十めんそうが、どんなものにも化けられる、へんそうの名人だったことを思い出したのです。

みんなは、へやの外へかけ出しました。そして、表門やうら門の外までしらべましたが、木村さんにへんそうした二十めんそうのすがたは、どこにも見えません。

「へんだなあ。そんなに早くにげられるはずがない。どこか、家の中にかくれているんじゃないかな」

明智たんていのぶかが、小首こくびをかしげて、いいました。

「そうだ、家の中にかくれているんだ。門の外の町はずっと見通しなのに、どこにもいないんだから、外へにげたとは考えられない。きつと家の中だよ」

「それにしても、あの黒いお化けは、いったいなにもものだろう」「うん、そうだ。あいつのほうせきを取り返さなけりやあ」

そこで、黒いお化けをつかまえて、しらべてみますと、

「おれ、ちんぴらたいのポケット小ぞうだよ。小林さんのめいれいで、こんな黒いシャツを着て、金庫の後ろにかくれていたんだ。おいらみたいなの、^{ちい}小ちやい子どもでなけりや、はいれはしないよ。だから、二十めんそうもゆだんしていたんだよ。さあ、これ、返すよ」

と行って、さつき、二十めんそうから取りもどしたほうせきを、明智たんていのぶかに手わたすのでした。

「それにしても、あいつ、いつの間にはうせきを取り出したのかなあ。ぼくたちは、ちゃんと見はつていたんだが……」

「あいつは、手品使いだよ。ほら、一度、金庫をあけて、ほうせきはこの中にほうせきのはいつているのを、たしかめただろう。あのとときだよ。金庫の前にしやがんで、ほうせきばこをもどすときに、すばやくほうせきだけをぬき取って、うちポケットに入れてしまったのさ」

黒いお化けのポケット小ぞうがせつめいしました。

金色のとら

それから、家じゅうのそうさくが始まりました。

明智たんていのぶかがふたり、書生がふたり、自動車のうんで、人手、それに、黒ふくめんのままのポケット小ぞうもくわわって、六人が二組に分かれて、ろうかからろうかへ、へやからへやへと、さがし回るのでした。

しかし、木村さんに化けた二十めんそうは、どこにもいません。もう、さがすところがないのです。

「あつ、このおし入れ、まだあけてみなかつたね」

ポケット小ぞうが、ろうかのおし入れの前に立ち止まって、そ

つとささやきました。

「うん、まだだ。あけてみよう」

明智たんていのぶかが、おし入れの戸に手をかけて、そつと開きました。開いたかと思うと、

「わあっ……」

とさけんで、あとじさりをしました。

おお、ごらんなさい。一頭の大きなとらが、ぬうつと、あらわれてきたではありませんか。

黄色いからだに、太い、まっ黒なしまがついています。その黄色いところが、金色に光っているのです。らんらんとかがやく二つの目が、じつと、こちらをにらんでいます。

家の中に、とらがいるなんて、なんという、ふしぎなことでしょう。まるで、考えてもみなかったことです。

みんなは、あまりのおそろしさに、立ちすくんだまま、どうすることもできないのでした。

金色のとはらは、ゆうゆうと、おし入れの中から出てきて、のそりのそりと歩きだしました。

そして、みんなのそばを通りすぎると、にわかには足を早め、いきなりかけだして、ろうかの向こうへまがって行ってしまいました。

ここは、たけしくんと、きみ子ちゃんのしんしつ（ねるへや）です。

さつき、書生さんが来て、二十めんそうが、家の中にかくれて
いるといったので、ふたりは、こわくてしかたがありません。ベ
ッドから出て、パジャマを着たまま、へやのすみっこで、たがい
のからだをだきしめて、ぶるぶるふるえながら、立っていました。
すると、入口のドアが音もなく、すうつと開いたのです。そし
て、そのすき間から、金色に光るものがあらわれてきたではあり
ませんか。

とらです。びっくりするほど大きな、金色のとらです。

ふたりは、あまりのふしぎさに、ゆめでも見ているのではない
かと思いました。しかし、ゆめではありません。生きたとらが、
ほんとうに、しんしつの中へはいつてきたのです。

大とらは、へやにはいると、あと足で立って、前足で、かぎあなにさしたままになっているかぎを、カチンとかけてしまいました。

ふたりは、もう、にげ出すこともできないのです。

金色のとはらは、ふたりの方へ、のそりのそりと近づいてきました。

さて、みなさん、これから、いったい、どんなことが起こるのでしょうか。たけしくんときみ子ちゃんは、この大とらに食われてしまうのではないでしょうか。

それにしても、家の中にとらがいたなんて、じつにふしぎです。

これには、なにかわけがあるのにちがいありません。そのわけとは……。

12

わらうとら

ふたりは、それを見ると、きやあつと行って、だきあつたまま、たおれるようにしやがんでしまいました。

「うふふふ……」

そのとき、へんなわらい声が聞こえてきました。へやの中からです。へやの中には、とらのほかに、だれもいません。では、とらがわらったのでしょうか。

ああ、わらうとら。お化けのようにわらうとら。

たけしくんときみ子ちゃんは、ぞうつとして、気が遠くなるような思いでした。

「うふふふ……。たけしときみ子、しばらくだったなあ。おれがだれだか、わかるかね」

ふたりは、そのきみの悪い声に、聞きおぼえがありました。二十めんそうです。あいつの声です。

「おれは、へんそうの名人だ。人間ばかりでなく、どんなものに

も化けられるんだ。もうじゆうにだつて、化けられるんだよ」

まるで、人間のようにな、あと足で立ちあがったとらが、ふたりのかくれているかべの間をのぞきこみました。

「うふふふ……。こわがらなくてもよい。おまえたちにかみつくわけじゃない。

ざんねんながら、おれはしっぱいしたんだ。ポケット小ぞうに、ほうせきを取り返されてしまった。そして、追つかけられたのだ。そういうときの用意に、おれは、とらの皮を、おし入れの中にかくしておいたんだ。それを着て、みんなをびつくりさせて、そのまに、にげだしたのだ。おれは、けつしてつかまりはしないよ。

ところで、きみたちについておくが、おれは、きみたちのおと

うさんに化けて、ほうせきをぬすんだ。だから、ここのうちには、きみたちの、ほんとうのおとうさんはいないのだ。

どこにいますかと思うね。うふふ……。ある場所にかくしてある。

そして、おとうさんと引きかえに、ほうせきをもらうつもりだよ。わかったかね。おとうさんを返してほしかったら、ほうせきを、おれにわたすように、みんなにたのむのだ。ほうせきを、いつ、どこへ持ってくればいいのかは、あとで知らせるよ。わかったね。じゃあ、あばよ」

とらは、それだけのことをいってしまうと、あと足で、まどのところへ歩いていき、ガラス戸を開いて、まっ暗なにわへ、ぴよいととび出していってしまいました。

ふしぎなろうじん

木村さんのうちの近くに、こうしゅう電話が立っていました。そこは、やしき町と、しょうてんがい（店のたくさんある町）とのさかい目になっているのです。

もう、夜ふけでしたから、町は、ひっそりとして、人通りもないうように見えました。その暗い町を、コツコツと、くつ音をたてて、ひとりの大学生が歩いてきました。

ふと、大学生は、びっくりしたように立ち止まりました。そして、いきなり、いま来た方向へかけだしました。おそろしいもの

を見たからです。

向こうの大きなやしきのコンクリートべいから、ぴよいと、地面へとびおりたものがあつたからです。それが、思いもかけない、一ぴきの大きなとらだつたからです。

とらは、地面にとびおると、あたりを見回してから、こうしゅう電話の方へ、のそのそと歩いていきました。

そして、あと足で、ぬうつと立ちあがると、こうしゅう電話のドアを開いて、中へはいってしまいました。

大学生は、三十メートルほどにげ、町かどに身をかくして、それをぞいでいましたが、東京の町の中へとらがあらわれるなんて、まったくしんじられないことですから、自分の目がどうかし

たのではないかと、うたがいました。

こうしゆう電話に近づいて、たしかめてみればいいのですが、そんなゆうきはありません。近くの交番にかけて、このことを知らせるほかはないと思いました。

すると、そのとき、木村さんの門の中から、四、五人の人が、あわただしくかけ出してきました。

明智たんていのぶかや、書生たちが、にわににげたとらをさがし回ったすえ、門の外へ出てきたのです。

大学生は、その人たちを見ると、「あつ、あぶないっ」

と思いました。とらにおそわれたらたいへんです。そこで、ゆうきを出して、みんなの方へ走っていき、息を切らせながら、とら

のことを話しました。

「えっ、こうしゅう電話ですって」

「ええ、たしかに、あの中へはいりました」

「それじゃあ、外からドアをおさえてしまえばだいじょうぶだ。

そして、こうしゅう電話をぐるぐるまきにすれば、おりにとじこめたようなものだ」

明智たんていのぶかたちは、そんなことをいいながら、だいたんに、こうしゅう電話の方へ近づいていくのでした。

けれども、みんなが、おずおずとこうしゅう電話のそばへ来たときです。こうしゅう電話のドアが、中から、ぱつと開きました。みんなは、あつと行って、にげだしそうになりましたが、ドア

をあけて出てきたのは、とらではなくて、ひとりの、しわだらけのおじいさんでした。めがねをかけ、長い白ひげをはやし、古いかたのせびろを着た、弱々しいおじいさんでした。

大学生はびっくりしました。このおじいさんは、よく、とらに食われなかったものだと思いました。

明智たんていのぶかは、あつけにとられながらも、おじいさんの出たあとのこうしゅう電話の中を、そつとのぞいてみました。けれども、ふしぎなことに、その中はからっぽでした。大学生のいったようなとらのすがたなど、どこにも見えないのでした。

白ひげのおじいさんは、うろたえているみんなの顔を見回して、にやにやとわらいました。そして、ひよっこりひよっこりと、み

ような歩き方で、向こうへ立ち去ってしまいました。

13

マンホール

二十めんそうは、大きなとらにへんそうして、木村さんの家のそばにある、こうしゅう電話の中ににげこみました。みんなが、そのまわりを取りまいて、ドアが開いて、中から、ひとりこのろうじんが出てきました。そして、さつきとびこんだとらは、

かげも形も見えません。どこかへきえうせてしまったのです。

みんなは、あつけにとられて、そのろうじんを見送っていました。だが、ポケット小ぞうは、明智たんていのぶかに、なにかささやくと、そのまま、ろうじんのあとをつけていきました。ポケット小ぞうは、ポケットの中にはいるほど小さいといわれている少年です。あとをつけるには、つごうがいいのです。

ろうじんは、大きな黒いふろしきづつみを小わきにかかえて、すたすたと歩いていきます。その歩き方が、とても早くて、すこしも年よりらしい様子がありません。

ポケット小ぞうは、気づかれないように、ちよこちよこと、すばやくあとをつけました。

「ははん、わかったぞ。あのふろしきの中に、とらの皮が、まるめてつつんであるんだな。こうしゅう電話のはこの中で、それをぬいで、ろうじんのすがたになってあらわれたんだ。あいつは、さつき、木村さんのおし入れの中にかくれたとき、そこに用意しておいたふくや白いつけひげで、ろうじんにへんそうしたんだ。それから、とらの皮をかぶったんだ。だから、とらの皮さえぬげば、すぐにろうじんに化けられたんだ。一分間もかかりやしない。二十めんそうのやつ、うまいことを考えたもんだな」

ポケット小ぞうは、そんなことをぶつぶつつぶやきながら、なおもゆだんなく、ろうじんのあとをつけていきました。

ろうじんは、さびしい方へ歩いていきます。夜ふけのことです

から、あたりは、まっ暗です。

すると、ろうじんが、立ち止まって、道にしゃがむのが、かすかに見えました。

「おやつ」

と思つて、目をこらしていますと、ろうじんは、大きなまるいものを、地面からひき起こしているではありませんか。

「あつ、わかつた。マンホールの鉄のふたをずらしているんだな」
そうです。ろうじんは、マンホールのふたを開いて、その中へおりにいこうとしているのです。

「あの中へかくれるつもりなのかな。だが、おれがつけていることは気がつかないんだから、なにも、かくれることはない。する

と、……あつ、そうかもしれないぞっ」

ポケット小ぞうは、そこに気がつきました。

二十めんそうは、とんでもないことを考え出すやつですから、マンホールとそつくりのあなをこしらえて、そこから自分の住みかへ出入りしているのかもしれない。

マンホールだと思えば、だれもあやしまないのですから、こんなによいひみつの出入口はありません。

ろうじんは、マンホールにはいると、中から、鉄のふたをしめてしまいました。

ポケット小ぞうは、急いでそこへ行つて、鉄のふたに手をかけてみましたが、子どもの力で動かせるものではありません。

「よし、すぐ、みんなに、このことを知らせよう。そして、明智先生や小林さんと、電話でそうだんするんだ」

そういつて、ポケット小ぞうは、大急ぎで、もと来た方へ、かけだすのでした。

動くよろい

ポケット小ぞうの考えたとおり、そのマンホールは、二十めんそのの住みかの、ひみつのマンホールでした。

マンホールの中は、コンクリートのかべにかこまれていましたが、そのかべに、ちよつと見たのではわからない、ひみつのドア

があつて、それを開くと、ずっと、よこあながつづいていて、あのせいようかんのえんの下へ出られるようになっていました。そのゆか板が、上げぶたになっていて、それをあけて上に出ると、りっぱなへやがあるのです。

ろうじんにへんそうした二十めんそうは、そのへやへ上がつていきました。

「うふふふ。あぶないところだった。だが、おれは、まほう使いだからな。とらに化け、ろうじんに化け、それから、だれも知らないマンホールの入口だ。あいつら、おれがどこかへきえてしまったかと、おどろいているだろうて。うふふふふ……」

二十めんそうは、そんなひとり言をごといいながら、広いへやの中

を、ぐるっと見回しました。

それは、へんなへやでした。広いせいよう風ふうのへやのかべには、いろいろな形の刀やてっぽうなどがならべてあり、その下には、むかしのせいようのよろいや、日本のよろい、中国のよろいなどが、まるで、人が立っているように、ずらつとかざつてありました。びじゅつ品ひんの好きな二十めんそうは、古い刀やよろいなどを、このへやにかざつて、よろこんでいるのでしよう。

かれは、ドアをあけて、つぎのへやにはいりました。そこは、しんしつらしく、大きなベッドがおいてありました。

そこで、ろうじんのふくをぬぎ、顔のつけひげやかつらを取り、せんめん台で顔をあらい、ようふくだんすからパジャマを出して

着かえてから、よびりんをおすのでした。

すると、ドアにノックの音がして、ひとりのぶかがはいつてきました。

「かしら、うまくいきましたか」

「いや、しつぱいした。ちんぴらにじやまをされた。そして、みんなに追っかけられたので、いろんなへんそうをして、うまくにげてきたのだ。だが、あのほうせきは、きつと手に入れてみせるよ。……ああ、くたびれた。今夜は、もう、ねることにしよう」

二十めんそうは、そういつて、ぶかを下がらせてから、そのつくえの上においてあつたウイスキーをグラスについで、ぐつとのみほすと、そのままベッドにもぐりこんでしまいました。

さて、そのよく朝のことです。八時ごろ、二十めんそうは、目をさましてベッドから出ると、ドアを開いて、よろいのかぎつてあるへやにはいりました。毎朝、そのへやを見るのが楽しみなのです。

「どうだ、りっぱなものじゃないか。これだけ、世界じゅうのよろいや刀を集めているやつは、ほかにあるまい。ここまで集めるのには、おれも、ずいぶんくろうしたもんだからな」

二十めんそうは、さもうれしそうに、ひとつひとつ、よろいをながめながら歩き回るのでした。

「おやつ」

二十めんそうは、びっくりして立ち止まりました。すぐそばに

立っている銀色のせいよりのよろいが、かすかに動いたように思われたからです。

ふしんに思った二十めんそうが、その銀色のよろいを見ていると、ああ、これは、どうしたことでしょう。そのよろいが、だんだん大きく動き出して、こちらに歩いてくるではありませんか。よろいのお化けです。

二十めんそうは、ぽかんと口をあけ、あつけにとられたように立ちすくんでしまいました。

フエンシング

そのよろいは、銀色にみがいた鉄でできています。銀色のかぶとをかぶり、その下に、銀色のかめんのようなものが見えます。

その大きなよろいが、二十めんそうの方へ、しずかに歩いてくるのです。

「お、おまえは、なに者だつ。よろいの中に、はいつているのは、だれだつ」

二十めんそうは、思わず、かべぎわにあとずさりしながら、どなりつけました。よろいが歩きだすからには、中に、人間がはい

っているとしたか考えられないからです。

「はははは……。だれだと思うね。この声に聞きおぼえはないかね」

よろいの中から、人間の声が聞こえてきました。

「あつ、それじゃあ、おまえは……」

二十めんそうは、その声に、聞きおぼえがあつたのです。かれは、はつとしたように、顔色をかえました。

「はははは、わかつたかね。そのとおり、きみのてきの明智小五郎だよ」

「どうして、ここがわかつたのだ」

二十めんそうは、ふしぎそうに、聞き返しました。

「きみは気づかなかつたが、ポケット小ぞうが、きみのあとをつけて、マンホールの入口を発見したんだよ。ぼくは、そのマンホールから、はいつてきたのさ。その道には、いくつも、かぎのかかつたドアや上げぶたがあつたけれども、ぼくは、ばんのうかぎを持つているので、どんなドアでも開くことができるのさ。

そして、このよろいの中へかくれていたというわけだよ」
「うむっ」

二十めんそうは、さもくやしそうにうなつたかと思うと、いきなり、かべにかけてあつた長いけんを取つて、明智たんにいに向かつてきました。

しかたがないので、明智たんにいのも、よろいのこしにつ

るしていた、長いけんをぬきはなつて、二十めんそうのけんをふせぎました。

はげしいきり合いが始まりました。日本のけんどうではなくて、せiyōのフェンシングのたたかいです。

名たんていも、二十めんそうも、フェンシングのやり方を、よく知っていました。二十めんそうのけんが、明智たんていのむねを目がけて、はげしくつき出されてくるのを、明智たんていのけんが、はつしと受け止めて、空中にきりむすぶのです。二本のけんが、目にもとまらぬはやさでとびちがうので、まるで、銀色のにじがきらめいているように見えます。

ほんとうのけんですから、さわればきれるのです。しかし、両

方とも、あい手をきずついたり、ころしたりする気はありません。ただ、フエンシングのうでまえを、見せあっているのです。

二十めんそうも、なかなか強いけれど、明智たんていは、それよりいっそう強いのでした。

チャリン、チャリンと、銀色のけんがぶつかりあい、そのするどいけん先が、ひよいひよいと、のどやむねにせまってくるのを、明智たんていは、みごとにはね返しています。二十めんそうのこきゆうが、だんだんはげしくなってきました。

そのとき、さつと、つき出した二十めんそうのけんを、明智たんていは、自分のけんで、くるくるとまき返すようにして、ぱつとはねると、二十めんそうのけんは、手からはなれて、てんじょ

う高く、まい上がってしまいました。

二十めんそうのおくの手

二十めんそうが負けたのです。負けたとわかると、かれは、いきなり、まどのところへとんでいって、にげ出そうとしました。

「はははは。二十めんそうくん、だめだよ。この家のまわりは、おおぜいのけいかんが取りまいているのだ。とても、にげ出せやしないよ」

明智たんていは、けんを前につきながら、へやのまん中に立って、さもゆかいそうにわらうのでした。

二十めんそうは、まどから、にわをながめました。向こうの木の間に、けいかんが、ふたり、三人、四人と、見はっているのが見えます。

「ちくしよう、すつかり手が回ったな。明智くん、さすがにきみは、ぬかりがないねえ。だが、おれは、いつでも、さいごのおくの手が用意してあるんだ。おれは、にげ出してみせるぞ」

二十めんそうは、さけぶようにいったかと思うと、ぱつとまどにとびつくと、いきなり、空中に向かつてとび上がりました。

すると、ふしぎふしぎ、二十めんそうのからだは、すうつと、空中に上がったまま、落ちてこないではありませんか。二本の足が、まどの上の方に、ぶらんぶらんと、ゆれているのです。

明智たんていは、まどにかけよつて、外をのぞきました。にわの木の間にかくれていたけいかんたちも、まどの下へかけよつてきました。

「あつ、屋根だつ。屋根へのぼつていくぞつ」

ひとりのけいかんが、びつくりしたようにさけびました。

ごらんなさい。高い屋根の上から、なわばしごが、まどのへんまでぶらさがっています。二十めんそうは、それにとびついたので。そして、屋根へのぼつていくのです。

これが、かれのおくの手でした。万一のときのために、なわばしごを用意しておいたのです。

しかし、屋根にのぼつて、どうしようというのでしよう。とな

りの家の屋根と、くつついているわけではありませんから、屋根づたいに、にげることはできません。

この家を取りまいていたけいかんたちが、おおぜい、まどの下へ集まってきました。しかし、なわばしごは、ずっと上の方にあるので、地面からとびつくことはできません。さつき、二十めんそうがしたように、まどわくに上がって、そこからとびつくほかはないのです。

明智たんていは、大急ぎで、せいようのよろいをぬぎすてると、身がるなすがたで、まどわくに上がり、空中にたれているなわばしごに、さつととびつきました。

そのときには、二十めんそうは、もう、とつくに、屋根に上が

ってしまつて、下からは、すがたが見えません。

明智たんていは、なわばしごをのぼりきると、屋根に手をかけました。そして、ひよいと身をおどらせると、もう、屋根の上に立っていました。

急な屋根です。とても、立つたままでは歩けません。たんていは、はうようにして、てっぺんの方へのぼっていきます。

そのときです。ブルルン、ブルルン、ブルルン……という、ぶきみな音が、屋根のてっぺんの方から聞こえてきました。おお、おどろくではありませんか。かれのおくの手は、これだったのです。

かれは、空中にまい上がっていくのです。まるで、スーパーマ

ンのように、からだをのぼして、およぐように、空高くとびさつていくではありませんか。二十めんそうは、いったい、どうして、空をとぶことができるのでしょうか。二十めんそうは、ほんとうの、まほう使いなのでしょうか。

15

黒いかげ

明智たんていと、おおぜいのおまわりさんに取りかこまれたか

いじん二十めんそうは、屋根に上がって、そこから、まるでスーパーマンのように、空へとんでいってしまいました。

それから、一週間ほどたった、あるばんのことです。二十めんそうにねらわれた木村さんの家へ、小林くんがたずねてきていました。

木村さんの子どもの、たけしくんときみ子ちゃんは、小林くんとなかよしになっていたので、自分たちの勉強べやへ、小林くんをつれていって、話をしていました。

そのへやの外には、広いにわがあつて、まどに、黄色いカーテンがおりていました。

もう、夜の八時ごろのことでした。三人が話をしていると、と

つぜん、ぱつとでんとうがきえて、へやの中がまっ暗になってしまいました。ていでんのようです。

すると、まどにおろしてあるカーテンが、ぼうつと、明るく見えてきました。そして、そのカーテンに、なにか、もやもやと、黒いものが動いているではありませんか。

たけしくんは、ろうそくを取りに行こうとしましたが、その、もやもやした黒いものを見ると、もう、からだが動かなくなってしまうました。

三人は、まほうの力で引きつけられたように、カーテンから、目をはなすことができせん。

やがて、そのもやもやしたものは、大きな人間の顔であること

がわかってきました。まどの外に、なにものかが立っていて、その顔が、にわのでんとうの光で、カーテンにうつつていっているのです。それにしても、なんとというきみの悪い、大きな顔でしょう。一メートルもあるよこ顔が、黒々とうつり、大きな口をあけて、へんなふうにわらっているのです。

「えへへへ……」

なんともいえない、いやなわらい声が聞こえてきました。

「だれだつ。そこにいるのは、だれだつ」

小林くんが、どなりつけました。

「おれだよ、わからないかね」

かげの声が、うすきみ悪く答えました。

「だれだつ。名まえをいいたまえ」

「うふふふ……、まだわからないかね。おれは、二十めんそうだよ」

「えつ、二十めんそうだつて」

たけしくんときみ子ちゃんは、まつさおになりました。

「そこには、小林くんもいるんだろう。いいか、おれのいうことをよく聞いておくがいい」

かがが、大きな口をぱくぱくやって、しゃべりだしました。へんな声です。まるで、ほらあなの中でもしやべっているように、ビーン、ビーンとひびく声です。

「いいか、おれは、まだ、この家のほうせきをあきらめていない

のだ。あんなひどいめにあわされたのだから、そのかたきうちをするのだ。そして、明智のやつや、小林や、ポケット小ぞうを、あつと、おどろかせてやるのだ。うふふふ……、いまに見るがい。ほうせきは、きつと、ぬすみ出してみせるからな」

そこまで聞くと、もう、小林くんはがまんできませんでした。いきなり、まどにかけよると、カーテンをはねのけ、ガラツと、ガラスまどをあけました。てつきり、二十めんそうが、まどの外に立っていると思っただからです。

ところが、ああ、なんというふしぎ。広いにわには、見わたすかぎり、だれもいないではありませんか。

まどぎわに、しやがんでいるのかもしれないと、下をのぞいて

みましたが、そこにも、人のすがたは見えませぬ。

そのとき、たけしくんが、つくえの引出しから、かいちゆうでんとうを出して、小林くんにわたしたので、それで、そのへんをずっととらしてみましたが、やっぱり、だれもないのです。

あんなかげをうつしておいて、そんなに早くにげられるものでしょうか。そんなことは、とても考えられません。

三人は、ぞうつと、うすきみ悪くなってきました。二十めんそうは、またしても、まほうを使ったのです。

三人は、おくへかけこんでいきましたが、家じゆうのでんとうがきえていてまっ暗なので、かいちゆうでんとうで、台所のスイッチをしらべてみると、スイッチの切れていることがわかりまし

た。すぐに、スイッチを入れましたので、家じゅうが明るくなりました。

三人は、木村さんのへやにはいつて、今のできごとを知らせました。

それから、小林くんは、木村さんの耳に口をつけるようにして、ぼそぼそと、なにかささやきました。すると、木村さんは、感心したようにうなずいて、

「うん、それはいい考えだ。きみのいうとおりに行こう」と答えました。

小林くんは、いったい、なにを話したのでしよう。それは、二十めんそうを、あつといわせるようなけいりやくでした。どんな

けいりやくだったか、やがて、みなさんに、わかるときが来るでしょう。

そのばんは、そのまま、なにごともしこりませんでした。十時近くになると、小林くんは、木村さんと、ひそひそとなにかうちあわせてから、たんでいじむ所へ帰っていきました。

さて、そのあくる日の夜のことです。木村さんの家の中で、またしても、おそろしいことが起こりました。

木村さんの家は、広いせいようかんですが、たけしくんときみ子ちゃんのベッドは、二かいのしんしつにあります。

もう、夜の九時もすぎたので、たけしくんときみ子ちゃんは、おとうさんとおかあさんに、「おやすみなさい」をいうと、パジ

ヤマに着かえ、ふたりそろって、手すりのついた広いかいだんを上がつて、とちゅうのおどり場へ来たときです。後ろからついてきたきみ子ちゃんが、急に、「あつ」とさけびました。

そのおどり場は、はば二メートル、長さ四メートルぐらいの板の間で、後ろは、二かいのてんじようまでつづいた、白いかべになっていきます。その、えいがのスクリーンのような白いかべに、あやしいかげがうつつたのです。

「あつ、おにいちやま、たいへんよ。あつ、早くにげなければ……」

きみ子ちゃんの声に、たけしくんは、びつくりして、白いかべを見ました。

おお、これは、どうでしょう。

かべいっぱいの大きな手が、つめの長くのびた指を、おそろしい形にきゆうつとまげて、たけしくんの頭の上から、つかみかかってくるではありませんか。

きよじんの手です。まっ黒な手のおかげです。

それが、かべにうつつたたけしくんの小さいかげの上から、ぐうつとおりてくるのです。

たけしくんは、あまりのおそろしさに、「わあっ」といって、その場にうずくまってしまいました。

きみ子ちゃんが、このことを、おかあさんに知らせたので、大さわぎになり、木村さんや書生などがかけつけてきました。そ

のときには、もう、かべのかげはきえていました。そして、いくらしらべても、どうして、あんなかげがうつったのか、わけがわからないのでした。

ああ、まほう使いの二十めんそうは、これから、どんなおそろしいことを、始めるのでしょうか。

そして、小林くんのけいりやくとは、どんなことでしょうか。

16

われるポスト

さて、そのあくる日のことです。たけしくんときみ子ちゃんが、学校から帰ってきて、門のそばで遊んでいると、門の外から、ひとりの子どもがはいってきました。

赤い頭の毛を、おとなのようにきれいに分けて、あらいしまのせびろを着た、十二、三さいのせいよう人のような、へんな子どもです。顔は、りんごのように赤く、目は、大きく、まんまるで、頭でっかちな子どもです。

その、へんな子どもが、つかつかとはいってきたので、たけしくんときみ子ちゃんが、びつくりして見ていると、子どもは、たけしくんの前で、ぴたりと止まりました。

「ぼく、お使いだよ。さあ、これ手紙」

といつて、白いふうとうを、たけしくんにさし出しました。

たけしくんが、それを受け取ると、へんな子どもは、くるつと後ろを向いて、つかつかと、門の外へ出ていきました。

それから、じつにみょうなことが起こったのです。

へんな子どもは、門を出ると、向こうがわに立っている、まるいゆうびんポストのそばへ歩いていきました。

すると、ふしぎなことに、そのポストがぱつと二つにわれて、大きな口を開いたではありませんか。

あたりは、まったく人通りがないので、だれも見ているものはありません。

へんな子どもは、その二つにわれたポストの中へはいつていき
ました。すると、ポストは、もとのとおりには合わさって、ふつう
のポストになってしまいました。

こうして、へんな子どもは、ポストの中へかくれてしまったの
です。

そのとき、門の中のたけしくんは、わたされた手紙のふうを開
いて、中の手紙を読んできました。それには、こんなきみの悪い
ことが書いてあったのです。

今夜、ほうせきをもらいに行く。いくら用心しても、だめだ

よ。二十めんそう

さては、今の子どもは、二十めんそうの手下だったのかと、たけしくんは、門の外をにらみつけました。

「おにいちやま。あの子、人間じゃないわ。きつと、お人形よ」
きみ子ちゃんが、へんなことをいいました。

それを聞くと、たけしくんも、はっと気がつきました。

「そうだつ。あいつ、きかいみたいな、へんな歩き方をしてたね。声も、キーキー声で、レコードみたいだった。それに、顔がちつとも動かなかつた。あいつ、子どものロボットかもしれない」

たけしくんは、そういつて、いきなり門の外へかけ出し、通りの右左を見ましたが、子どものすがたは、どこにも見えませんでした。

「おやつ、あんなところにポストが立っている。いつできたのかなあ」

たけしくんは、通りの向こうがわに、見なれないポストを見つけてきましたが、まさか、あんなしかけのあるポストとは知りませんから、ここへ、新しくできたのだらうと考えました。

たけしくんときみ子ちゃんが、今の手紙をおとうさんに見せるために、家の中へはいつてから、しばらくすると、一台の小がたトラックが、あのあやしいポストのそばへやって来ました。

ふたりの男が、トラックからおりると、そのポストを持ち上げてトラックにつきみ、上から大きなおおいをかけて、そのまま、どこかへ走り去ってしまいました。

ふつうのポストなら、とてもふたりの力では持てませんから、このポストは、本物より、ずっとかるくできているのにちがいません。

あのへんな子どもも、ポストの中にはいったまま、運ばれていったのです。

ロボット小ぞう

おそろしい手紙を読んだ木村さんは、すぐに、けいさつや、明智たんていに電話をかけて、二十めんそうがやって来たなら、つかまえる手はずをととのえました。

昼間から、五人のけいじと、明智たんてい・小林くん・ポケット小ぞうたちが、こつそりやって来て、ほうせきを守るために、それぞれの持ち場につきました。

さて、その夜のことです。

たけしくんときみ子ちゃんは、書生にまもられて、しんしつにとじこもっていましたが、はとどけいが、「ポツ、ポツ、ポツ」と、九時をうったときです。

「コツ、コツ、コツ」

だれかが、ドアをたたくのです。「だれっ」と聞いても、なにも答えません。そして、また、コツ、コツ、コツと、たたくのです。

たけしくんは、そつとドアに近づくと、いきなり、ぱつとあけました。

すると、ドアの外に、へんなやつが立っていたのです。ロボツト小ぞうです。昼間、手紙を持ってきた、あの、へんな子どもです。

「あつ、きみは、さっきの子どもだな。なにしに来たんだっ」
たけしくんが、ゆうきを出して、どなりつけました。すると、

「へへへへ……」

ロボット小ぞうは、へんな声でわらいました。そして、ろうかを、とことこと向こうへ歩いていくのです。

「待てっ」

たけしくんは、そのあとを追いかけました。書生たちも、いつしよになって追いかけてきました。

「みんな、来てください。へんなやつがいます。二十めんそうの使っている、子どものロボットがいるんです」
と、たけしくんがさげびました。

その声を聞くと、けいじたちが、かけつけてきました。

ロボット小ぞうは、そんなに早く走れないと見えて、からだをまっすぐにして、あいかわらず、とことこ歩いているものですか

ら、たちまち、けいじたちにつかまってしまいました。——このへんな子どもは、はたして、人形だったのでしょうか。

さて、ちようど、そのさわぎのさいちゆうに、まっ暗な木村さんのしよさいでは、おそろしいことが起こっていました。

からだにぴったりついた、黒いシャツとズボンを着けた黒ふくめんの男が、金庫の前にしやがんで、なにかしているのです。

みんなの注意を、ロボット小ぞうのほうに集めておいて、その間に、ほうせきをぬすみ出そうというのでしよう。この、黒ふくめんの男は、むろん二十めんそうなのです。

二十めんそうは、金庫やぶりの名人ですから、どんなげんじゆうな金庫でも、わけなく開くことができます。

カチツという音がして、金庫のとびらが開きました。そのときです。二十めんそうの口から、「わあっ」という、おどろきのさけび声がとび出しました。そして、二十めんそうは、いきなりにげ出そうとしました。

これは、いったい、どうしたわけでしょう。

金庫の中に、なにがはいつていたのでしよう。

17

あらわれた明智たんてい

二十めんそうがおどろいたのも、むりはありません。金庫の中のたなが、すっかり取りのけられて、そこに、少年たんでいだんのポケット小ぞうが、かくれていたからです。

ポケット小ぞうは、ピストルをかまえて、金庫の中から出てきました。小さな子どもですが、ピストルにはかいません。二十めんそうは、両手をあげて、あとじさりをしました。にげ出そうとすれば、うたれるので、にげるわけにはいきません。

「はははは……。ほうせきばこを、べつのところにかくして、おいらがはいっていたのさ。そして、おじさんのあけるのを待って
いたんだ」

ポケット小ぞうは、そういつて、金庫のかべにとりつけたベルのボタンをおしました。

「これをおせば、方々ほうぼうでベルの鳴るしかけだ。いまに、みんながやって来るからね。おとなしく待っているんだよ」

それを聞くと、こんどは、二十めんそうのほうが、大声でわらいだしました。

「わはははは……、だめだよ。そのベルは、おれがさつき、線を切っておいた。いくらおしたって、鳴りはしないよ」

ポケット小ぞうは、はつとして顔色をかえました。そのすきを見て、二十めんそうが、いきなりとびかかってきたのです。そして、ポケット小ぞうのピストルを、たたき落としてしまいました。

ポケット小ぞうは、「あっ」といって、ピストルをひろおうとしました。二十めんそうは、それをつきとばして、自分がピストルをひろおうとします。ポケット小ぞうは、すぐにとびついていて、二十めんそうの手にかみつきました。

「あつ、いたいっ」

さすがの二十めんそうも、かみつかれてはかないません。

それから、おとなと子どもの大かくとうになりました。

ポケット小ぞうはすばしこいので、つかまえようとすると、するりとぬけ出してにげ回り、あい手が近づくと、またどこかに食いつくのです。

二十めんそうも、この小さなあい手にてこずっていましたが、

そのうち、とうとうポケット小ぞうをつかまえて、大きなハンカチでさるぐつわをはめ、どこからかなわを取り出して、手足を、ぐるぐるとしばってしまいました。

「ちんぴらのくせに、ほねをおらせやがった。だが、もう、どうすることもできまい。ははは……。いつまでも、そこにころがっているがいい。それじゃあ、あばよ」

といって、にげ出そうとしたときです。

「二十めんそうくん、しばらくだったなあ」

という声が聞こえ、ドアのところに、明智たんでいのにこにこ顔があらわれました。

二十めんそうは、「あつ」といって、はんたいがわのドアにか

けつけると、そのドアが外から開いて、そこに、ピストルをかまえた小林くんが立っていました。

「はははは……。二十めんそうくん。さすがのきみも、もう、どうすることもできないね」

二十めんそうは、ぱつと身をかがめると、ゆかに落ちていたポケット小ぞうのピストルをひろい取って、明智たんていの足に、ねらいをさだめました。

二十めんそうのさいご

「おれは、人ごろしはきらいなんだ。だから、きみをころしはし

ない。足をうつんだ。そして、にげ出すんだ」

そういったかと思うと、いきなり、ピストルの引き金を引きました。——カチツと、音がしました。しかし、たまはとび出しました。また、引き金を引きました。けれど、またカチツと音がするばかりです。

「あははは……。そのピストルには、たまがはいつていないんだよ。ポケットくんが、おどかしに使っただけだよ」

明智たんていが、さもおかしそうにわらいました。

「しまった」

とさけんで、二十めんそうは、ピストルをなげつけました。さつき、からのピストルに手をあげたのかと思うと、くやくしてたま

らないのです。

かれは、いきなり、明智たんでいにとびかかっていきました。またしても、大かくとうが始まりました。二十めんそうも強いが、明智たんでいも、じゅうどうの名人です。おそろしい組みうちがつづきました。

ちようど、そこへ、五人のけいじがかけつけてきました。そして、二十めんそうは、とうとう手じようをはめられてしまったのです。

二十めんそうがつかまったと聞いて、木村さんは、たけしくんときみ子ちゃんをつれて、そこへやって来ました。

小林くんは、しばらくしているポケット小ぞうのなわをとき、さ

るぐつわをはずしてやりました。口がきけるようになる、ポケット小ぞうはすぐに、二十めんそうをどなりつけました。

「ざまあ見ろ、とうとうつかまっちゃったじゃないか。明智先生は、えらいだろう。おまえなんか、かないっこないよ」

ポケット小ぞうは、もと、ちんぴらですから、ことばづかいが悪いです。

そのとき、たけしくんが、明智たんていを見上げてたずねました。

「先生、ぼく、わからないことがあるんです。おとといのぼんは、まどのカーテンに、大きな顔がうつたでしょう。ゆうべは、かいたんのかべに、おそろしい手がうつたでしょう。そして、ど

こをさがしても、だれもいなかっただのです。どういうわけですか」
すると、明智たんていは、にこにこして答えました。

「あれは、げんとうだよ。きかいを、にわのしげみの中にかくして、あんなかげをうつしたのさ。そのげんとうきは、ずっと遠くからうつせるから、だれもいないように見えたのだよ。ね、そうだろう、二十めんそうくん」

二十めんそうは、苦にがい顔をして、うなずきました。

「それから、もう一つわからないことがあるんです。二十めんそうは、どうして空をとぶんですか」

「それは、二十めんそうがフランスの発明家から買った、せなかへとりつけることのできる、すごく小さなヘリコプターなんだよ。

二十めんそうは、木の上なんかはそのきかいをかくしておいて、さいごには、いつも、それでにげ出していたのだ」

明智たんていは、なにもかも知っていたのでした。こうして、さすがのかいじん二十めんそうもつかまってしまったのです。木村さんは、ほうせきをぬすまれないですんだのでした。

「明智先生、ありがとうございます。小林くん、ポケット小ぞうくん、みんなありがとう」

木村さんは、にこにこして、みんなにお礼をいうのでした。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第21巻 ふしぎな人」光文社文庫、光
文社

2005（平成17）年3月20日初版1刷発行

底本の親本：「たのしい二年生」大日本雄弁会講談社

1958（昭和33）年8月～1959（昭和34）年3月

「たのしい三年生」講談社

1959（昭和34）年4月～12月

初出：「たのしい二年生」大日本雄弁会講談社

1958（昭和33）年8月～1959（昭和34）年3月

「たのしい三年生」講談社

1959（昭和34）年4月～12月

※「たのしい三年生」初出時の表題は「名たんていと二十めんそ
う」です。

※底本は、連載の回数を見出しとしています。

入力：sogo

校正：北川松生

2016年6月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたった

のは、ボランテイアの皆さんです。

ふしぎな人

江戸川乱歩

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>